禪宗詩偈

19
626

萬葉評釋序

古典の研鑽は諸科の智識に助けあり、個人及び民族の學術技藝を尋繹し、之れが起源に溯り、之れが沿襲を知るの門路たりこ雖も、亦其の嗜讀は、人の氣品を清高にし、人の性情を優秀にし、智識の雜毒を清淨にして、季世の假僞を擺脱せしむるに益有り。況んや古を以て今の鑑と做し、往を推して來を警むるものに於てをや、佛國最近時の活動に注目するものは、必ず外務大臣デルカスセ氏の名を記憶するからん。氏は實に古典學校の出身たり。氏の古典尙經世に涉るありこ謂ふか、グラットストン翁のホーメル

古今文會 寄贈本

を耽讀せる、耳有るもの鼎鐺も亦之れを聞く。而して其の法律經濟と果して何の交渉かある。蓋し翁や、其の初めケンブリッヂ大學の數學科得業生たり。知る可し、眞才は繩墨の能く羈する所にあらざるを。是の故に云く、六經我れを註し、我れ六經を註すと。志有るものは皆誠に此くの如くなるべきのみ。

此の書は著者金風萬葉集を評釋せるもの。而して著者必ずしも世の所謂國學者流にあらず。萬葉集を通じて、總べての古典を讀み、萬葉集を通じて、世のあらゆる人情を讀む。故に萬葉集は國史の羽翼として視る亦可。神話、宗教、哲學、言語、風俗等凡べての文明現象を取りて、此の寮中より窺ふ、亦可ならずや。蓋し著者の志此に在り。其の序を謁するに及んで、書し以て卷端に弁す。若し其れ之れに因りて氣品を清高にし、性情を優秀にし、智識の雜毒を清淨にして、季世の假僞を擺脫するが如きは、讀者の用意如何に在り。

明治三十三年十月

上田萬年

萬葉評釋目次

一　萬葉集の價値……一
二　萬葉集の研究……三
三　萬葉學の進歩……六
四　萬葉學の分科（上）……九
五　萬葉學の分科（下）……一四
六　萬葉評釋の由來……一八
七　賀茂眞淵の萬葉論……二九

評釋

四季　二十五首（春十首　夏二首　秋十一首　冬二首）……三三
相聞　十七首……七三
羇旅　二十五首……九一
遊覽　十二首……一一九
古京　四首……一三二
皇居　三首……一三六
雜事　九首……一三九
宴會　三首……一四七
賀　二首……一五一
一　萬葉集新校本統由系譜……一五三
二　萬葉學統由系譜……一五五
三　萬葉學年表……一五九

以上

萬葉評釋

明治三十三年十月三十日古今文學臨時增刊第九號

長井金風

一　萬葉集の價値

斯文は金石の如し、得て泯滅すべからずといふか、麗句繪藻何ぞ又人間に湮沒し、遂に佚して傳はらざるもの多きと甚しきや、夫れバアシイの英國古代の流芳遺韻をなつかしみ、博訪廣採して、幸ひに墜緒を茫々に維きたる、スコットが邊境の音樂を湖光山色の間に覩て、採りて之れを不朽にしたる、其の勞たる又果して幾くぞや、羅馬の古曲の散佚は、シセロの時、既に之れが爲め惜痛して措かざりしと云へば、吾人は今坐して緗帙を播き、容易に一千二百年前の古詩人と面り相對して、其の風采に接し、其の辭氣を

聽くが如くなる幸福は何に譬へん。萬葉一集、其の之れが珍となすべきもの、獨り吾邦同胞の爲めのみと謂ふことを得ず。

萬葉集の選者は、或は橘諸兄一人なりといひ、諸兄と大伴家持との二人に選修を仰出されたるなりといひ、或は家持一人の手に出づとなし、未だ定說として見つべきものなきが如しと雖も、いづれにしても聖武、孝謙兩朝の間に出で、七世紀の初めに屬し、其の書を成し、集に名けてより蓋し既に一千二百の星霜を經たり。此の書、收むる所の歌、長歌、短歌、旋頭歌合せて、四千五百餘首、其中作者ある歌二千六百餘首作者知れざる歌一千八百餘首、蓋し又盛んなりと謂つべし。

文學は其邦社會の華にして、言語は國民の生命なり。今吾人此の希有の典籍を有し、之れによりて、文化の淵源する所を知るべく、以て得失を正し、以て天地を動かし、以て鬼神を感せしむるは詩より近きは莫しとすらいへれば情性を吟咏して、其の上を風し、事變に達して、其の舊俗を懷へば、亦以て下れる世の匿風を匡して、拙き心の鄙吝を滌くに足らさらんや。抑も萬葉一集、上代の歌曲を蒐輯し、假令其の選擇は、後の代々の諸集の整齊に及ばず、儘〻私人の家集をすら交へたるは、其の筆刪の道に於て、甚だ欠くる所ありとするも、其の撲にして飾らず、蕪雜にして眞實を存するは却つて後人をして直接に古を覩るの益あらしめ、轉〻吾人をして珍異の念を增さしむるものあるを覺ゆ。學者何ぞ此の集を尊重せざらんや。

二 萬葉集の研究

萬葉集の多く歌曲を蒐輯し、得るに隨ひ、雜陳して概ね選ぶ所なきは、首尾貫穿したるホオメルの史詩と其の等類を一にせざるは謂ふまでもなきことなり。吾邦に在りてイリヤット、オデッセエと稍相近きものは、古事記神代卷の如き、或は是れか、然れども翻つて其の價値より云へば、萬葉集の

尊重すべく、珍異たるはホオメルの二詩と何ぞ擇ばん。且夫れ萬葉集は單一なる歌集にあらず。是の故に萬葉研究の我れに盛んなるは、ホオメル研究の彼れに於けるが如く、紀元前四百五十年の頃より都市の公費を以て梓行したりし如き盛事は、我れに於て見ることを得ず、アリストオトルの歴山大王の爲めに備へしといふ匱本の貴きは、又我れに於て見ることを得ず、大王が亞細亞遠征の行營にも、尙枕秘として嗜讀せしてふ希有殊勝なる崇拜者を有せざりしが如しと雖も、我れには又我れの傳ふべき盛事あり、篤信ありて、其の尊重せられ、嗜尙せられたること、亦必ずしも彼れに劣るべしとも見ねざりき。萬葉研究の初めて書史に見ねたるは十世紀の中程にして、村上天皇の天暦五年敕ありて、梨壺の五人をして、よみ、とき、ねらばし、む、所謂五人は清原元輔、紀時文、大中臣能宣、源順、坂上望樹なり。所謂よみときねらばしむとは點せしむるなり。梨壺の和點之れを古點といふ。

然れども當時の訓點未だ完からず、此の集三點あり、初めて周鼎殷盤唯其の異とすべきを覺ねて、玩ぶべからざるもの、此に至りて、初めて往者の高古と稱するもの、必すしも清廟の瑟にあらず、朱絃疏豁、一唱して三歎すべく、更に之れを喩すべき無しとなしぬ。世の萬葉集を知りて賞するもの實に此にはじまる。所謂三點は

○古點　源順等梨壺五人——次點　法性寺入道關白大政大臣、大江佐國、藤原孝言、中納言匡房、源國信、中納言師輔、藤原基俊等——新點　仙覺檀律師

なり。夫れ上古の典籍を研究し、其の意義を疏通し、之れによりて、當時の事情風俗を講明し、古人の精神思想に徵し、更に比較して反復考覈せんことは、研究の武歩漸く進んで、學術の功、時代と共に積りたる後の業にして、其の初めや訓詁の勞を籍りよみときねらふことを先にせざるべからず後人の聰慧に自負して、何ぞ古賢の刻苦を無視することを得んや

三萬葉學の進歩

訓詁稍完きを致して、人々初めて其の語句を了解することを得れば、初めて其の意義を訓釋し、其の姿情を玩びて、其の雅俗を辨じ巧拙を定むるに至るべし。然れども世人の習俗は時樣の文字を製作して、應酬の敏捷に誇るの外、未だ容易く六代の衰を振うて、一世の風を廻さんとの大望を起すものあらざるべければ、萬葉研究の歩武漸く進むと雖も、尚徽典として敬して之れを取扱ひたるのみにして、之れを以て自家藥籠中の物となし取りて、一時の巴調を歴せんと試みたる如きものは、輙く出づる能はざりき。故に詩として之れを品隲するものは、寥々として晨天の星の如く、訓詁の次に來れる學者は、却つて一時局促して、屋上屋を架し餖飣文字徒に沒分曉の理窟を列べ、些細なる穿鑿を事とするに過ぎざりき。然れども時代は進行して已まず、昔人之れを流水の逝いて返へらざるに

譬ふ。萬葉學の進歩は七瀬の淀のよとみて流れざるが如くなる能はざるなり。凡そ古書の解剖研覈せられ、縱横痛快に學者の講明に任せたるもの、其の我邦に在りては、未だ此の書の如く盛んなるはあらざりしなり。而して其の解剖研覈、尚未だ到らざる所あり、前人の勞を致す尠少ならざりしと雖も、後進の功を立つべき餘地、尚綽々として、前途頗る有望なるものなくんばあらず。故に本邦の典籍を論じ、又未だ曾つて萬葉集を讀むより快なるものは之れあらざるなり。

萬葉集は上代文學の遺物として傳承せられたる國民の珍寶なると共に、譬へば烏々切々千年の歴史を語る、名細しき不死の阿禮にして、絃に倚らざる日本のラプソディストたり。抑も萬葉集は、無數の短曲を、秩序なく蒐輯したるのみ。固より之れを以て、ホオメルの史詩及び其他エピック、サイクルの等匹となすべからざるや言を待たず。而も萬葉一集、能く當時の言語を

傳へ、當時の地理を指示し、當時の道德を語り、當時の宗教を記憶し、當時の政治を辨し、當時の風俗を證し、當時の技藝、及び智識を見べき時は、即ち之れを以て恰當の歴史と爲し、將た貴重の史料と爲すに於て、何の疑ひか之れ有らむ。是の故に萬葉の珍異とすべきは、獨り其の文學者の机邊を飾るべきが爲めのみにあらず、其の中に含める滴々蜜の如き芳潤は、獨り年少詩人の枯腸を潤すべき魏臺の神液にあらず、又實に許多の科學者の爲めに一點の靈犀を點すべき不思議の金鉾たり。況んや彼のホオメルの史詩に觀て、紳士の風格を養はんとするもの、此の集中特に肢体を具へたるエチルスト、オヂシアスト無く、ヘレン、カリプソ無しと雖も、善く讀んで、細に咀嚼しゆかば、個中幾多の英雄有り、幾多の美人ありて、精神面目到る處に生動し、珠光劍氣、嶋影波彩互に映じ、互に耀き、笙簧手に觸れ、錦繪迷盼、又或は峰峽廻繚、風情遐美、吾人をして應接に遑なからしむるものなきにあら

す。即ち虞拉杜斯頓の身臺閣に在り、神風雲に馳するを以てし、乃ち朱を研してホオメルを點し、書を著して之を釋するに至りては、風情何ぞ散朗にして、其の氣品又何ぞ鬱然蒼秀たる。今吾人不佞、才既に時に補無く、道亦苟も當世と合はずんば、則ち彼の梓材の如し、丹漆を勤めず、朴斲を勞すと雖も、遂に素質に負かむ。影を戢め迹を削りて、獨り默々を守る。地僻秋早し、紙窓竹屋燈火蕭然たり。古書を繙いて古人を尙友す、又聖朝無用の人たるに適せずや。前時萬葉學進歩の末光に托し、此の書を釋して世に問ふ所以也。

四 萬葉學の分科 (上)

萬葉一集含む所の資寶富饒、既に此くの如し。今此に萬葉學分科の要を紀する、亦迥然にあらず。

(壹)萬葉言語學

萬葉言語學は萬葉集に現はれたる言語に依り、日本言語の研究資料とな

すものにして、舊時は單に萬葉集の言語を解釋するに過ぎざりしと雖も、萬葉學者の全部は、一見萬葉言語學者たる觀なきにあらざれども、後世に至り專ら文學として萬葉集を觀たる純詩人の生するに至り、萬葉集を嗜讀するものにして、必ずしも言語學者ならざるものを出すに至りたり。此の類の詩人は、尙古派、一名格調派、即ち專ら萬葉調に模倣するを主とする一派、時調派、一名神韻派、即ち萬葉集を時調に消化して讀まんとする一派との差あり。後の一派、即ち時調派の詩人は、萬葉集中より其の時調に近き歌のみを抄出して傳唱し他は措いて顧みざりき。

萬葉言語學の嚆矢をなしたるものは、即ち彼の訓點に於て嚆矢をなしたる前記の梨壺五人なるべし。源順は固より萬葉集を離れて、特立せる言語學者たりしを以て、此に絮說を用ゐずと雖も、萬葉集の幽を闡き微を顯し、依りて以て人間に煥彩たらしめたる偉功に至りては、此に特筆大書して、

長く斯文の爲めに尸祝せざるべからず。蓋し梨壺五人其の績容易に分明にすべからずと雖も、殊に源順を重視するは、從來學者の一致する所たり。然れども萬葉集をして、之れを清廟神秘の器たらしめずして、普ねく國民をして手觸れて目睹るべからしめたるものは、仙覺の功なり。仙覺奧書に抑先度愚本假名者、古次兩點、有異說歌者、於漢字左右、付假名畢、其上尙有心詞窺曲歌者、加新點畢、とありて、萬葉集中、諸本無點の歌、長歌旋頭歌合せて一百五十二首、盡く推點を加へたり。萬葉集の點本は此に至り初めて完全を告げぬ。時に後嵯峨天皇の寛元四年なり。萬葉集註釋二十卷、即ち世に謂ふ仙覺抄なるもの、是れ實に斯學の暗夜に認めたる一抹の曙光たりき。之れより先、前記次點の諸家及び袖中抄の著者顯昭の如き萬葉集に於て福裨の功ありしは勿論とす。特に次點の諸家中には、彼の有名なる元曆本の筆者あるを記憶せざるべからず。其後藤澤遊行寺の由阿、詞林采葉抄十卷

を著し、二條關白、及び冷泉相公に献しぬ。事は北朝貞治年間に係かる。其の說は多く、仙覺、袖中二抄により新に發明する所なきものゝ如し。

季吟の拾穗抄三十卷は、其の師貞德の旨を祖述し、宗祇、幽齋の說を承け、まゝ仙覺、由阿の誤謬を正したり。後國學の大に復興するに至り、契沖の代匠記出てたり。春滿の童蒙抄は、千陰の屢引據したる所あり。代匠記は不朽の鴻篇たりきと雖も、固より水戸西山公の需めに應じ、專ら公の爲めにせるものにして、其の書廣く行はれさりしかば、當時學者も亦之れに接したるもの至つて尠かりき。蓋し契沖と西山公との萬葉に於ける關係は聊かアリストオトルと歷山大王とのホオメル傳統に於ける關係と相類せずとせず。西山公も亦釋萬葉集五十卷の著あり。眞淵の萬葉考、冠辭考に至りては、大月中天に懸りて、衆星光を失ふの看なくんばあらず。眞淵は獨り古書を校し、古語を釋するに止まらず、更に進んで此の書の次第秩序を論じ、議

論風生氣鋒當るべからず、萬葉學此に至つて實に一振せり。而して其の言語學に於ける、翁の地位に至りても、亦實に屹然地を拔くものあるは、言ふを須たず。宣長の萬葉集玉の小琴、千陰の略解は、人の知る所なり。然れども是等は、旨と萬葉集の言語につき述作したるものにあらず。無名氏の萬葉集見安二卷は、卷の順により難句を摘出して畧註を加へたるものなり、後池永泰良なるもの之れが補正十卷を著しぬ。惠岳は選要抄二十卷を著したりしが、又別に撮要一卷を物し、契沖、眞淵二家の訓の異同を擧げ論せり。源稻彥の萬葉梯二卷は、伊呂波順により、難句を釋したる小本なり。是等と系統を異にして、中御門宣胤の萬葉類葉抄あり。入江昌喜といふ者、寛政九年之れが補闕十五卷を著せり。宣胤の著は延德年間敕を奉して選する所、昌喜の抄は、多く契沖の說を用ゐたり。釋春登の萬葉用字格一卷は、又自ら一機軸を出したるものなり。即ち其の書は五十音順により、正音、略音、正訓、

義訓、略訓、約訓、借訓、戯書の八綱目に分ち用字の格式を論じたり。正木千幹の楢落葉五卷は、此の集に初めて詠み出てたる詞の限りを集めたるものにして、當時斯學の研究漸く既に歩武を進め、殆んと餘蘊なきに至りたるを知るべし。田中道麿の東語梁一卷は、東歌の中より通音のものを集めたるもの、是れ又一種の新研究たり。小山田與清の萬葉集類語十卷は、五首、七首の句を五十音順に次第して、其の下に卷數、張數を標示せり、此は專ら後世の歌よむ者の便にせるのみ。鹿持雅澄の古義一百二十五卷は、發明する所なしと雖も、古人に折衷して釋義を立てたり。

五 萬葉學の分科 (下)

(貳)萬葉地理學

上代の詩歌に徴して、所在地理の沿革を推知し、古代地理學の講究に資するは、是れ亦夙に學者の着目する所となれりき。獨り奈何せん、當時の制、諸

侯各々其の提封に固守し、士人濫りに關塞を越ゑて四方に出遊することを得ず。故に志を抱いて、空しく歌人坐して名所を知るの痴愚に安んぜざるを得ざりき。故に當時の研究の地理學に貢献する所は、意外に鮮少にして、古史、又は和名抄によりて、歌枕の所在を考へ、其の音訓を正すを以て足れりと爲すの已むを得ざるに至らしめたり。諸家の此の集を釋せるもの、其の地名に於て、亦疏傳して遺さゞりしと雖も、印淵の遠江歌考一卷、伯本直香の上野歌解二卷、及び前記の東語梁の如き、特殊的研究に屬するものは、又自ら一体を成すものたり。

(參)萬葉史學

此の集の結集、及び傳來、沿革を考究し、選者及び作者、姓名不傳作者、點註者、抄釋者の閲歴行實を稽査し、以て其の製作、及び學術の上に現はれたる時代の特色、四周の影響を講明するものにして、特に獨立して是等の爲めに

稿を起したるものは、源義雅の作者部類一卷、外遺者未詳の人物履歴九卷有り。木村正辭は、現存唯一の萬葉學者なり、其の著、萬葉集書目提要は、完全なる萬葉史學にあらずと雖も、學者に稗補する、もの尠少ならず。

(四)萬葉社會學

萬葉集に於ける禮樂刑政道德宗教、衣食住及び交通の狀態、生業の有樣、並に技藝及び智識の類を研究するを云ふ、是等の題目、昔時は單に歷史上の一現象と看做し、萬葉集の國史の羽翼たるを唱道するもの多かりしも、未だ獨立して是等の著作を公にしたるものあると無し、今井以閑の萬葉緯二十卷は、史を以て集を證し、後來此の一科に志有るものに便益せずといふべからず。

(五)萬葉博物學

無名氏の類林十五卷有り、萬葉集の研究者には、幸にして三島三木等の奇

怪なる迷說を固守するもの無しと雖も、其の實、榛と芽子との異同すら未だ分明ならざる程なれば、吾人は切に斯の一科學の尙大に闡明せられんことを冀はさるを得ず。全註を物したる諸家の、固より初めより、此の一科を重視したるは言ふを待たず。

(六)萬葉詩學

詩形論、詩体論、音韻論、一般の修辭論、作者性格論等は、眞淵、宣長等によりて、盛んに唱道せられ、一時文壇の寂寥を破りしのみならず、詩學としての萬葉研究者は、之れに先つこと凡そ六世紀にして、小倉百首を以て有名なる定家卿の萬葉集長歌短歌說といふを著せるあり、其の淵源する所は、固より久くして且つ遠しといはざるべからず。契沖、眞淵等の燈を揭げてより、田中道麿は選集萬葉徹四卷を著して、二十一代集中本集の歌の入りたる限りを拔き出で其の詞、其の作者の異同を標目したり。此の研究は、獨り詩學

のみならず、言語學の上に於て、又頗る重要の者たらずんばあらず。伊能魚彦の千歌、澤眞風の淺茅原、長瀨眞幸の佳調の如き、學術に於て殊功無しと雖も、作歌者の爲めに甘露門を開きたるの觀有り。本居太平の山常百首は萬葉集を讀まんとするものゝ爲めに津梁を與へたるものにして、又頗る老婆心切なるを見る。以上殊に萬葉二字を標置して起れるものについて學くるのみ。

六『萬葉評釋』の由來

萬葉學の進運實に此の如し。其の蘭菊美を爭ひ、金剛、金剛と相打つの觀有るや、我邦典籍中此の如く痛快に解剖研覈せられたるもの、他に多く其の比類匹儔を見ることを得ざる所にして、纔かに之れと肩を比すべきものは、源氏物語の一書あるのみ。

今吾人の此に『萬葉評釋』を出すや、固に兒を憐み醜を忘るゝの沙汰にして、

世の萬葉學の浩波を望んで、其の徒に茫渺涯なきを見、之れが津筏を得るに苦しむものゝ爲めにせり。蓋し萬葉學の進歩は前章來記述する所の如く、其の各科學者の輩出亦彼れが如しと雖も、不幸にして、從來學者なるもの、自ら標置することは、則ち太だ高しと雖も、其の分科の見に於て、未だ甚だ明亮ならず、却つて分科の專攻を以て恥つべしとなすが如きの惑を思ひ、徒に時論に援牽せらるゝに畜ふる所の、意外に匱乏ならざるに係らず、當時一般學術の之れが素をなすもの、頗る欠くるありしを以て、其の綜合組織の道に於て憾なき能はず、隨つて其の說明不十分にして、曖昧朦朧の譏を免る能はず。萬葉學の當に大に繁興すべくして、而して、紹隆の任、實に其人無かりしもの、職として之れに由らずんはあらざるなり。是を以て輓近耳學の徒、蝦蟇口を張りて囂々萬葉集を云々するものありと雖も、鬼面小兒を嚇するの類にして、眞

に萬葉集の何たるを辨せず、況んや吾人が前回に於て萬葉學の分科此くの如く滋きを說くが如きを聞かば、氣怯ぢて畏縮し、心怪んで却走するものあらんとす。吾人の『萬葉評釋』を出すに於て、慈悲方便眞淵翁の『新採百首解』に依據したるもの、豈已むを得んや。

『新採百首解』は嘉永四年の刻本ありと雖も、多くは傳寫して行はれたり、而して魯魚の謬太だ多く、『書目提要』にも、今本校合粗漏にして、をり〳〵誤字ありといへり。此の書は固より作者の人がらしるく、さすがに從ふべきの說多しと雖も、眞に善く此の書を讀み、眞淵が採錄の本志を知れるもの未だ曾つて之れ有らざりしを以て、古今此の書を傳誦するもの少からざるに係らず、徒に其の字句の訓詁を尊重して、翁が選採の眞意は晦滅して、毫も世人に窺知せられざりき。今吾人が『萬葉評釋』を物せんとするに當り、其の歌數は勿論、其の選擇は盡く翁の新採に從ひたるのみならず、其の部立、及

び序位は全く翁新採の原形を有したり、此の如く吾人が翁の此の抄を敬重したる所以のものは、翁が此の選の眞意を忖度し、翁一生の大本領大抱負の獨り此の一書に存することを發見したるが爲めにして、吾人は故らに其の新採の原形を存して、以て翁が眞面目を見るべからしめ、以て翁が一生の大事業にして、萬葉學千古の新光彩たる此の原本の價値を幽晦知られざるに顯揚せる所以なり。

前述の如く『萬葉評釋』の採れる歌、其者、及び其の歌數、部立、序位は盡く眞淵の『新採百首』に從ひたりと雖も、其の解釋に至りては、必ずしも眞淵を墨守せざるのみならず、往々眞淵に反對せる所すら少からず。又吾人が特殊の見解を出したるものありて、假令語原、及び地名、人名などの註疏には、眞淵に據りたるが多く、然らざるも、契沖、及び春滿、宣長、久老、千蔭などの說に參考したるもの少なからずと雖も、全く私意を以て取捨し、且私意を以て改

竄し、或は轉化し、或は全く反對したれば、其の疏註の往々前哲の文字を蹈襲したるもあれど、其の責任は全く吾人一個の自ら負ふ所にして之れを以て眞淵は勿論他の諸賢を累すること勿かるべきなり。

抑も吾人が此に眞淵が一生の大本領、百年の大抱負は總べて繫りて、『新採百首』の一書に存し、『新採百首』は實に眞淵が心血を注ぎ盡したる曠前絶後の大著作なりと爲すものは、吾人其の好む所に阿り、一時夸言して俗を駭かさんが爲めにはあらず。吾人の評隲偶然ならざるは、以下吾人の叙述する所を諦聽し、後徐ろに其の書を把りて、細心精讀せば、初めて吾人が此の言の徒に人を河漢にせざることを知り、而して吾人が這般創見の功、亦沒すべからざるものあるを覺らむ。

眞淵が新採の眞意は、第一其の部立に在り、第二其の序位に在り。

『新採百首』の部立は、九種にして、實に左の如し、

(一)四季
(二)相聞
(三)羇旅
(四)遊覽
(五)古京
(六)皇居
(七)雜事
(八)宴會
(九)賀

今之れを『萬葉集』の原書に比するに、原書は其の卷別につきて、多少の出入異同なきにあらずと雖も、大低

(一)雜歌

(二)相聞
(三)挽歌
(四)譬喩歌
(五)四季雜歌
(六)四季相聞

の六種たり。今眞淵は之れを進めて九種と爲し、而して挽歌を除き、譬喩歌は歌意に依り、之れを相聞に併せ、更に羇旅、遊覽、古京、皇居、宴會、賀の六部門を增設せり。此の中羇旅、遊覽、賀の如きは、代々の選集、既に其の例を開きたるを以て、之れを以て眞淵の創意と爲すことを得ずと雖も、其の特に獨立して古京、皇居、宴會の三部門を開きたるに至りては、翁の創意にして、實に其の寄托の旨尠少ならざるを見るべし。

夫れ國家の危殆は、主權の所在曖昧にして、强有力なるもの、擅に政を爲す

より太甚しきは無く、國体の解弛は、言語、宗教、文學の外國化して、蕩然其の本質を留めざるより太甚しきは莫し。抑も眞淵の時は、果して何の時ぞ。眞淵等皇道首唱の功、國學創刱の業、今既に磊落天地に軒り、彰爀として人の耳目に在り、今必ずしも言はじ。當時文恬武熙海內久しく幕朝の事無きに忸れ、士人柔媚、猫の如く、學者爭うて侯門の一飽に就き、盛んに辞章を作爲し、經子を曲解して、唯覇政の千秋万歳を嵩呼し、其の及ばざらんことを是れ恐るゝの間に立ちて、獨り時俗に抗して極衰の王室に謳歌し、墜緒の茫々たるを尋ねて、國語の素微を漢文の黑漫々裡に揚ぐるもの、其の志たる又誠に悲且壯ならずや。今眞淵の『新採百首』を選するを見るに、其の舊習を一洗し、先例格式に拘々せず、特に部門を增減し、古京の篇を擧げて、以て低徊の感愴を寓し、皇居の章を設けて、以て萬乘の尊きを知らしめ、宴會の什を存して、以て古昔禮樂の洋々として、如何に君臣の偕和し、政化の行はれ

たりしかを偲ばしむる所以にあらざるはなし、吾人の此の一書の選採、偶爾に出づるものにあらずと爲し、依りて以て標出して翁が一生の大本領此に在り、百年の大抱負此に存し、光前絶後の大著作となすもの、之れが爲めのみ。

吾人の此の推定は、更に仔細に此の書を檢して、其の歌章の排列を觀、其の序位の整然法有るを察せば、一層明瞭なるを致すべし。

此の書の歌數一百、而して四季二十五首(巻十、夏二、秋十一、冬二)相聞十七首、羇旅二十五首、遊覽十一首、古京四首、皇居三首、雜事九首、宴會三首、賀二首なりとす。開卷第一先つ久方之天芳山此夕の歌を出し、以て飛鳥、藤原二宮の頃の國民が、擊壤の古歌を採り、皐々たる盛世の民風を揮摧し、洋々たる大雅の正音を皷吹し、之れに次くに昨日社の咏を以てし、劈頭先づ大に鋪張して、更に之れを振作せり。四季の後に相聞を置き、夫婦を經し、孝敬を成す

の旨を寓し、一轉し羇旅、遊覽に入り、以て先王行幸巡狩の盛を鳴らし、并せ系くるに將帥國司の干役旋歸の感を以てし、其の情を叙し、物を象する、互に相同じからずと雖も、悲喜反映して皆昔時王政の事情を察すべからしむ。此の如くにして、之れを承くるに古京を以てし、古を以て今に況し、人をして盈虛の感有り、一片忠懇悠然として中より發せしむ。皇居三首、典重麗密、或は詞采燃ゆるが如く、風神絶世、或は眞率話の如くにして、矩度謹嚴、雜事の篇、首に謗佞人歌を置き、而して其の事を擧げて中敗し、感傷して死に就くを見るや、同情の動く所、正邪を刑法に問はず、所謂辞を以て意を害せず。其の終りや、即ち宴會の什を擧げて、以て置醴の遊を思ひ、鹿鳴の吟を反復せしむ。蓋し此の次序は王室の式微、殆んど麥秀の嘆あらしむべくして、而して忽ち龍闕の壯んなるを恢復し、奸を誅し賢を薦めて、太平の鴻業を開き、五禮を定め百度を興し、憲章法則、規摸弘遠、暇有れば則ち式宴優遊、賢

者の樂みを樂むが如く、而して之れを結ぶに冬ゐもれる早蕨の時を得て萌え出で、御代榮ゑんと陸奥の郡の深山に黄金花咲くを以てせるもの、遙に卷首久方之天芳山の霏々靄々たる朝霞と相照應して、眞に是れ金聲玉振するもの、是に於て全篇一百首、首々皆活動し、緒發して宮商應じ、言形はれて雅頌興るを覺ゑ、爽籟雲天と共に高く繁章霞月と倶に亮かなり。一百餘首は是れ一百餘節の長歌にして、五百句三千一百言累々貫珠の如く冷々叩玉に似たり、淵渟雲布、辞の狀ずべき無し『新採百首』は眞淵が中興の懺言にして、翁が無量の感慨此に寓し、渾身の心血此に集り、殊に其賀陸奥國出黄金詔書歌を以て筆を擱きたるものは、仲尼獲麟の微旨と符するものにして新採百首は事を詩を删るに托し、志を春秋を作るに同うするもの、即ち翁が此の書に於て知我罪我の重を措きたるもの亦以て知るべきのみ、不幸にして翁亦言はず、弟子亦傳へず、此の書の眞意遂に晦沒して

今に至れり、潛を明かにし、微を顯はし、以て翁をして地下に莞然微笑して首肯せしむるもの、我れに非らずして其れ誰ぞ哉。

七 眞淵の萬葉論

眞淵の萬葉學に鉅功あるや、謂ふを須たず、而して眞淵が萬葉集に籍りて以て滿腔の忠慨を漏したるもの、前回論する所の如し、若し夫れ眞淵が詠歌の格調を尙び、悠揚、崇重、敦厚を以て其の宗旨と爲したるに至りては、世既に普ねく之れを識る、今眞淵が新採百首解の卷首に弁したる序文を取りて、之れを此に存するものは、獨り此著の眞淵に負ふ所多きの故を以てのみにあらず、此の序文は、やがて眞淵の萬葉論の萬葉論と看做すべく、而して眞淵の萬葉論は、其の平生の詩學を發揮して殆んと餘蘊無く、和歌史眼の燃犀炬の如きを見ると共に、和歌史上に於ける萬葉集の地位を論じて正鵠を得るものたるを以てなり。

古の歌は、天地のなしのまに〳〵なる海山の如し、さかありて新玉の月日と共に移り行く雲風花紅葉につけて、いひ出つれは、今たに其の節をも見るが如く、誠わりて愛かになん覺ねける。中頃の歌は、猶其のかのつからなる海山の如くなんあるが中に、鶯のかゝ鳴山の奥、鰐のいかれける海のそこひなどをは除きて、眉のことくにはひやかに錆なす平かなるさまを言ひつれは、風流なることの極みなりけり。後世の歌は、その誠ある心は、わすれ行きて、唯此のみやひやかならむをのみ願ひ、おのかしし、細かなる巧みを添へもてきぬれは、高山は短山となり、大海は小池に移りて、終には庭の面に作れる如くなんなりにける。大凡そ物のうつろひゆくわさも、一たひ二たひなとこそあらめ、あまたゝひとなりては、いと異樣にならすやはある。譬へば富士の嶺をおもひて、比枝の山を望み、塩釜の浦を戀ひて、近江の海に對ふ如きは、さても有なんを、其比枝も、あふみも、

また〳〵移りて、はとなき庭に作りたらんは、いかて心苦しからさらん。去れと道遠き境を懷ふとては移しもしつべきを、其の又の後の世となりては、譬へば富士の山、塩釜の海などの近く住まん人、其の海山は常ある樣とて、短山小池などを家の庭に作りて愛づる餘りに、年月經て、立ちも出てねば、近くさる海山の有ることをも忘れて、人の誘へとも、我が庭には如かじとのみいひ居らんか如くなりにける。然る時に、かく處狹くなりにては、其のもとに返へるべきものと、よき人のいひけるを聞きて、或る人試みに程なき庭を出て、雪の朝、月の夕ことに思ふとち、駒並み舟競ひしつゝ見るに、彼の處狹く、さかなかりしことを、始めて覺ねつ。となんいひける。かく古のまかなひは、あしかきの間近くのみあるを掻き分けて見ぬ人こそ怪しけれは、かれやつかれ此の心をいはまくするまゝするほとに、やんことなき仰せことときへうけたまりたれば、彼の海山あ

す、かのつからなる百くさの歌を萬の葉てふふみより摘み出て、峯の雲
あかれる世の意をむかへ、濱千鳥跡ある語をとりつゝことわりを識し
ぬるになんありける。おなかしこ。
（此の文日知館舊藏本のまゝを寫し出てつ）

春

春雜歌（卷十）

春雜歌は、凡そ春の物を詠める、くさ〳〵の歌故に去かいふ。夏、秋、冬も、去かり。古今和歌集の雜歌には異り。

久方之天香山此夕霞霏微春立下。
ひさかたのあめのかく山此夕
霞たな引はるたつらしも

久方は天てふことの冠辞なり。『續日本紀』の歌に瓠葛の天と書けるを思ふに、聞きひさこの内のむなしきを、天の形に譬て瓠象の天といふなり。此の語や上代の民が天地自然に對ずる思想感情を知る一端ともなりなん。契

冲の久堅の字面に拘泥して釋したるは誤謬なり。古人も『禮記』郊祭に以陶瓠象天地之性てふも似たる意と覺ゆといへり。此の類尙多し、比較して知るべし。

天芳山は大和國高市郡に在り、神武天皇よりうちつゝきて此の山ちかく都し賜へば、皇都の鎭とも崇まれし山なり。天はアメと訓むなり、芳山は『神武紀』に香山此云介迺夜麼と註せり、濁るべき語なりとぞ。蓋し此の山の名は『神代卷』には天照天神の天岩窟に籠れる時、天香山の眞坂樹を掘り取りたるの記事もありて、此は固より同名異地なるべく、又『風土記』の逸文にも、天上有山、分墮地、一片伊豫國天山、一片大和國香山などあるに考合はすれば、一は天孫種族の原住地なる高天原の地名にして、一は移住後其の地名を齋し命けたるものなるべけれど、此の如く天芳山なる名稱の吾人の祖先と由來因緣甚た深遠なりしを見、又彼の天智天皇の御歌にも見ゆる如

く畝傍耳成との三山の相爭ひきてふ傳說の如き、將た此の山が實際に於ても國原は煙立ち立つ、海原は鷗立ち立つてふ眺めさやかなるのみならず、其の理想上、殊に當時の市民をして感興尠からざらしめたりしものありしならむ。眞淵大人も香山を望めば、此ゆふべのとやかに、かすみ棚引つ、春の立たるならんてふのみ、かく事もおくうるはしく、すかたも高く調ふがかたきさりといへり。

原集には、春雜歌七首あり『右柿本朝臣人麻呂家集出』とあるを以て、一樹に人麿の自詠なるべしと速斷するは非なり。家集てふことは古今の人の歌を家に書集めたる中に、己か歌をもよむに隨ひて加へたるなり。其の自らよめるは、多くは表に名を去るし、古歌もよみ人去られたるは、表に去るせるならん。人麻呂のよめると去るしたるならぬは他人のなり。此の集に歌の左に書ける詞は、たゞ〳〵家持卿の筆と見ゆるもあれど、又憶良大夫

なとの家集も交り、或は作者の自註も有り、其外は裏書に後人のかきたるにて、いにしへの事しらぬ後俗のをわさも多し。要するに此の歌、人麿の口つきならず、飛鳥、藤原二宮頃の詩人ならぬ詩人の時に感じて、直に胸臆を據べたるものなるべし。

八偶しゝ我大君、高光る日の皇子、荒妙の藤井が原に、大御門始め給ひしてふ皇室のいとも御繁昌なましゝ際、日の經(ハテ)の大き御門に春山と茂(シ)みさび立てりてふ青香久山(アヲカグヤマ)に一抹拭ふが如く輕靄霏微たるを見、物象の此の如く和平なるに感じ、深遠を求めずして、自ら雅音足り、皇澤の此の如く洋々たるを拜して簡撲の中、雍穆の氣象を具へたり。眞淵の百首を採り首に此の歌を擧げたるは深き心のありてなり。

詠霞（同卷）

此の卷に何を詠めるとしるせる多しと雖も、この題は後に一家に集むる

人の書きたるあり。後世の如く先つ文字の題を設けてよめるものと思はゝ、古に遠へり。叙情の詩は、事情に適切なるを尚ぶによりて、自ら其の局に當り、事に關係あるものゝ中心已む能はずして詠み出てたるが、熱狂の氣奔注して、力鋭く、調高きを致す理なるも、何を詠むてふ如き、叙景の作は文學上より言はゝ、題詠は無下に賤しくして、口號は貴しとのみいふべからず。

昨日社年者極之賀。春霞。春日山爾速立爾來。

きのふこそ年は暮しか春霞

かすかの山にはや立にけり

眞淵は暮れし、かと訓み、千蔭の畧解なぞ、はてし、かと讀めり。吾船將極(ワガフネハテン)と書きたればこゝにもはてし、かとよむべしといふは當れるに似たり。

こそてふ辭は、物のあるか中より是こそ、彼こそとぬきでゝいふ時に用ゐ

る。こゝも昨日こそとゝりあけていふなりと眞淵はいへり。又乞ひ願ふにいふもあれど、それは別にして、句の終りに船こき出よかしといふへきを、こき出乞(デコ)とよめる類多し。社の字を借りて書けるは、神社に物を願き乞ふは其の社に在る人を禰宜といふ類にて、乞ふことに依りて社とも書くなるべしとぞ。

古今和歌集に『昨日こそ早苗とりしか』ともよめるは、此の歌をうつして、意は時の早くうつるをおとろけるなり、即ち此の歌を一層觀念的、智性的にしたるなり。前の香山をば、藤原の都人などよめるが如く、此には春日山を奈良の市民の謳ひたるなるべし。眞淵の『いともよろしきか上にて、猶又いはゞ前の歌の事もなく、うるはしきにむかへては、昨日こそなといふわたり、かつ〳〵後のさまなり』と評したりし如く、此の歌はふるとしの終は、唯昨日にこそあれ、早くも春のいたりて春日山に霞の去たりと、景中に情を

叙べたるあり。されど未た早苗とりしかとよめるが如き巧緻に渉らざれば、猶自然を失はずして、餘韻悠揚たるを覺ゆ。

春雜歌（同卷）

子等名丹關之宜朝妻之片山木之爾霞多奈引。

こらか名にかけの宜しき朝妻の

かたやまきしに霞たなひく。

關の字は開と誤りたりしを元暦本により改めたるより關となれり。關はあつけるてふ意にてかけともよみ、又關の字にて訓を借りたるにもあらんかともいへり。

かけのよろしきとは、其の名にかけ負はするがよきといふなり。玉たすきかけのよろしきとは、其の名にかけ負はするがよきといふなり。玉たすき懸の宜しき、又栲領巾(たくひ)のかけまゝはしきなどいへるに同じ。妻といはん料のみ。

『けさ行きてあすは來なんといふ兒らに朝妻山にかすみたな引』の歌を釋して、今朝かへりて、又明し日の朝こんてふ妻は、朝毎に逢ふから、即ち朝つまといふべし、夜に逢ふを夜妻といふ類なりといへれば、夜妻は忍び妻故に心苦しきを、人目はゞからて、朝までも見るはよろしければ、こらかな名にかけのよろしき朝つまとつゝけたるなるべしとぞ。子等は女子なり、吾妹子を畧して、しかいへる歌多し。朝妻山の山きしに霞のたな引きたる初春の氣色を詠みたるなり。

朝妻は大和國の地名にて、高市郡なるべしといふ。『新撰姓氏錄』に太秦公宿禰の先祖を大和國朝津間腋上の地に居らしむとあり。腋上は『神武紀』に見ゆる腋上嗛間丘に登りて國望し給ふといへる地なるべく『天武紀』に九年九月癸酉辛巳幸于朝嬬云々、『仁德紀』の御歌にあさつまのひるのを坂を云々、允恭天皇を雄朝妻稚子天皇と申すなど皆大和によれり。後人の近江

國のあさつまにまかひて思へるは誤りなりと眞淵辨じたり。

此の歌は前に出せる天芳山の歌とつゝき出てたるものにして、香山、眞木向、弓槻などの地名見ゆれば、前にも言ひたる如く大和の國人の詠める者にして、近江に關係なかるべく、いづれにしても當時の簡撲にして、敦厚なる人情を見るに足り、兼ねて其の男女の風俗、婚嫁の習慣をも考ふへきなり。前者には溫粹なる上古の國情(ナショナリチー)こもり、此首には摯誠飾らざる昔人の戀愛(ヴ)を味ふべし。

雜歌（同卷）

梅枝爾鳴而、移徙鶯之、翼白妙爾、沫雪曾落。

うめかえに鳴てうつろふ鶯の
はね白たへにあわ雪ぞふる

鳴きてうつろふは、枝うつりして鳴くともよめるにおなじ。白妙の妙は借

字にて、絹布の惣名をたへといふ、故に白細布とも書けり。絹また布にても細かに織りたるを和たへといひ、布のわろきを麁たへといふ。白きを白たへといふのみ。白くたへなることゝ釋するは、借字に拘泥していへるものなり。名詞の形容詞に轉じたる例と知るべし。

此の歌、單に見たるさまをそのまゝいひつらねたるが、おのづから麗はしき歌となりたるなり。眞淵翁は、喜びて此の種のものを取りしならむ。よくまれ、あしくまれ、かくこゝろ得て後によむべしとなり。當時詩經比興の義入りてより、和歌に寄托の意盛んに行はれ、中に其の弊の甚しきもあり。萬葉一集すなはなる調のみと思へるは、汎ねく讀まざる過なり。

野遊（同卷）

これも亦かゝる題を設けてよめるにあらざるは勿論なり。

百磯城之大宮人者暇有也梅乎挿頭而此間集有。

もゝしきの大宮人はいとまあるや
うめをかざしてこゝにつとへり

暑解にはいとまあれや、つとへると訓めり。此の歌後世は『百しきの大宮人はいとまあれや、さくらをさしてけふもくらしつ』となほして赤人の歌にせり。眞淵は其の誤謬を辨じて云く、

其一は、有や、この類、白水郎有哉などと書ける多けれど假字に奈禮やと書くはなし、さて古人の語例を思ふに、いとまあるや、あらしなるやとよむなり、古今集今本には、何なれと書きされと、後の筆なるべし。

其二は、梅をさくらとして、こゝにつとへりをけふもくらしとせる、此歌の文字いかてさかよむへきや。言葉を後世にさたかへては、古人の歌にあらず。なれる時世の語に依て、其時の人の心をもありさまをもさり、うつり行代々をもあきらむへきを、いかなる心にてなはされけん、信し

て古を好むとは、もろこしの聖ものたまへりけん、いかなるむくつけ人のむかしをは、なみするにや。

其三は、此卷はみなよみ人しれさるを類して集めたるものを、何の證ありて、此歌赤人のよめるとはいふにや云々

百磯城は、多くの磐石にて堅めたる皇の城てふ意にて、百磯城、又百石城と書けるは、最も語意を得たる正字なりとぞ。

『懷風藻』序に及至淡海先帝之受命也、恢開帝業、弘闡皇猷、道格乾坤、功光宇宙、既而以爲、調風化俗、莫尚於文、潤德光身、孰先於學、爰則建庠序、徵茂才、定五禮、興百度、憲章法則、規摹弘遠、負古以來未之有也、於是三階平煥、四海殷昌、旋纊無爲、巖郎多暇、旋招文學之士、時開置醴之遊、當此之際、宸翰垂文、賢臣獻頌、雕章麗筆、非唯百篇、など見に、集中淡海朝より平都に至る、諸臣春日應詔の作甚た多し、以て此の歌の由來する所を知るべし。

山部宿禰赤人作歌（卷八）

此の歌、原集四首の中、前二首は中春以下のさま、後二首は初春のことなり。

此には後なるをのみ擧けたり。

赤人は他書に見えず、萬葉集にのみ其の名あり、父祖は知りかたけれど、聖武天皇の頃と見にて、此の天皇の御世の歌、集中に多し、人麿より少しく後の人なり、山部を後世山邊と謬れるは、古今集の眞字序が佃を作りたるなり、山邊はヤマノベにして、眞人なれども、山部はヤマベにて別氏なり。

吾勢子爾、令見常念之、梅花、其十方不所見、雪乃零有者、

わかせこに見せんと思ひし梅の花

それともみえす雪のふれゝは

わかせこことは古へは人を貴みていふ語なり、故に集中に家持と池主との贈答其外にも、男どちの互にわかせこと稱してよめり、夫婦の稱とのみ思

へるは誤れり。

ふれゝばは、ふりければの約まりたるなり。

情中に景ある歌にして巧に倒置法を用ゐ、句法錯落として、氣格自ら卑しからざるは赤人の赤人たる所以なるべし。

從明日者。春菜將採跡。標之野爾。昨日今日毛。雪波布里管。

あすよりは若菜摘んとしめし野に

きのふもけふも雪はふりつゝ

標野とはいつこにまれ、標を立つるをも、注連縄ひきたるをも、そこの草木に云るべの物を結たるをも、又右によりて、心にたもひ領しをもいふべし。この赤人などは心におもひしめしをいふならんとぞ。そを地名とし、吉野に在りなどいふは、かさね〳〵の誤りなり。

もゐ出つる若菜に、先つ人をして野邊の春色を思はしめ、既にして昨日も

今日も雪はふりつゝと飽くまで、天象の矛盾を示し、之れが對比を分明にして、以て中間若菜つまんとしめし人を點して、情景兼ね叙したる働きを見るべし。前首後首共に滑稽の美を歌ひたるものなから、後首の明快なるに如かざるなり。

春野爾。須美禮採爾等。來師吾曾。野乎奈都可之美。一夜宿二來。

はるの丶にすみれつみにとこし我そ

野をなつかしみひとよねにけり

須美禮は花の形、工人の墨斗に似たれば、しか名けたるなりといふ。一夜ねにけりと定かにいひたれば、まことに其の野邊わたりの家にやどれりしを、すみれ咲野に寐たりとはいひなせるならんといへり。古の歌は、實を虛の如く風流にいひなすが多く、後のは虛を實のことくとりなすめりと眞淵翁は云へり。所謂虛を實の如くしたりとは、想像を巧に活現したるの謂

にして、今の世の具象的といへるに似たり。菫さく野邊に、銀つくりの太刀はきたる年少の宮人が、酒よりも濃き春色に、酔へるが如く野をなつかしみ歸るを忘れ、茜さす夕日を全面にあびて、草びきよせ枕とし、恍然としてまどろみたる、自ら是れ一幅の濃彩畫ならずや。

大伴宿禰家持春雉歌　（同卷）

今本には養雉とあり、されど古本、及び目錄にも春字なり、歌の意も野雉のことなれば、春字に從へるなり。

家持卿の父は大納言旅人卿なり、其の家の歴代の帝室に功あることは、家持卿の『喩族歌』及び賀陸奥國出金詔書歌』に詳し。『萬葉集』は卿の家集の如く見ゆ。

春野爾安佐留雉乃妻戀爾己我當乎人爾令知管

はるの野にあさるきゝすの妻戀に

おのかあたりを人にぞれつゝ

あさるは集中に求食と書きたれば大意はぞられたり。尙其の詳なる考は『冠辭考』を見るべし。

眞淵翁は、野なる草木のくまに隱れて人にかぞるゝ雉なから、妻戀にはあへす、聲たてゝすむあたりを人に知れつゝ、身をはろはすをあはれむなり、ひとのうへにもとるべき事なりと釋し、千蔭ぬしは是は歌の詞によりて、雉の歌と端詞せれど、おのが思ひ餘りて言に出しより他し人に云られたる意をそへたる譬歌なるへしといへり。眞淵も比興の意を認めざるにあらざれど、其の意を付るに兩者自ら輕重の別あるに似たり。いづれにしても大差なけれど、眞淵の前說に從ひ、單に野にすむ雉が妻戀に聲たて、人に己かあたりをしられて捕はれたる滑稽の眼前の景、口頭の語と見るの輕妙を覺ゆるには如かじ。

厚見王歌（同巻）

『聖武紀』に天平感寶元年夏四月無位厚見王等十三王に從五位下を授らると見ゆ。

河津鳴甘南備河邊陰所見今哉開良武山振乃花

かはつなく神なび河にかけみゐて
今やさくらんやまふきのはな

かはつ鳴は、其の河のさまをいひて、歌のかざりともするなり、佐保川、よしの河にも、此のことばを冠らせたり、神奈備川は大和國高市郡に在り、此の歌は奈良に都うつされて後、故郷の神南備川をなつかしみてよみ給へるなるべしとぞ。

眞淵も、かく調べたかくすくれたるはかたき也と許しぬ。譬へば鏤氷彫瓊の如く流光自ら照し、而も又『あふ坂の關の清水に影見ゐて今やひくらん望月の駒』の邊幅微狹に類せず。故に眞淵は、そのもとつくところを知らん人『萬葉集』をなぞかたふとまざらんといへるは溢美にあらず。

夏

大伴家持作歌（卷十七）

歌の左に云く、『天平十六年四月五日獨居於平城故郷舊宅大伴宿禰家持作』。これは天平十三年に京を山城國相樂郡久邇郷に遷されて、又はと、なく奈良へかへされたり。其間によめるなり。かの久邇の京とゝのはらぬはど、猶多くは奈良に在し時の事にか、又たゞ〳〵立かへりてよめりしかともいへり。いつれにしても久邇遷都の後、奈良の故郷舊宅につれ〳〵わぶるすさびに詠み出てたるなり。

青丹余之奈良能美夜古波布里奴禮登毛保登等藝須不鳴安良奈久爾

あをによしならの都はふりぬれと

もとはとゝきすなかすあらなくに

青丹余之は青瑩（アヲニ）よしにて、楢の實の青くして玉の如してふ意なるべし。余之は眞すげよしそがの河原、大魚よし鮪など類例多し。之は助辭なり。皆眞すけよそが、青瑩よ楢といふのみ。ますけよしそがは『日本紀』歌に『ますかよそかの子か』とあるごとく重ねてはめたる言葉なり。

素性法師の『いそのかみふるき都のはとゝきすふるはかりこそむかし也けれ』は境相似たれども、こはたもしろくのみ聞にて、身にしむべく故郷のさまは覺ねず。されどものゝまことをいふと、たゞにたくみたるとのわかちとのみ說くが如きはあたらず。まことをいひたりとて、辞藻伴はされば、其の詩を誦むも、たれかよく身にしみて感動せんや。『もとはとゝきす鳴かすあらなくに』は勁直にして、人の肺腑に入り易けれども、『聲ばかりこそむかしなりけれ』は餘り比量計校に落ちて、自ら人の感情を薄くらしめず

んばあらず、是れ其の勝劣の由りて生する所以なり。

同時の歌

加吉都播多衣爾須里都氣麻須良雄乃服曾比獵須流月者伎爾家里。

かきつはたきぬにすりつけ益荒雄の

きそひかりするつきは來にけり

古人衣すれるには黄、丹、青いろなどは設け置きもしけん、その外は花にても、草木の實、葉などにても、時にあひたるものして摺りつとみゆ。

服曾比獵は競ひつゝ獵するをいふ。此n夏獵にして、『推古紀』に十五年夏五月五日藥獵(クスリカリ)於菟田野云々、『天智紀』に七年五月五日天皇縱獵於蒲生野云々、『萬葉集』卷十六の乞食者の歌に爲鹿述痛作平群乃山爾四月與五月間爾藥獵仕流時爾云々など見ゆ。藥獵とは藥草を採るものといへど、却つて鹿をとるを專らとするにやあらん。

此の歌は久邇の都の榮ゑたる頃なれば、奈良は昔時の繁華流水に歸して、再び天子藥獵の壯觀を拜するを得ず、燕子花開いて、王孫歸らず、夏景の徒に沖淡にして、故都の益〻蕭條たるをかなしめるなり、情韻雙佳に、十分警鍊なるを覺ゆ。『詩經』肅々兎罝、椓之丁々、赳々武夫、公侯干城の句ありて、例の大伴家々世特有の感慨もはの見われたり。兎罝の詩は后妃の化を見つべき大雅の音なれば、家持の此の歌にも葵心傾日の義は確かに認められたり、從來萬葉を釋するもの、此に思ひ及ばざりしば、かへす〳〵物足らぬ心地す。

秋

七夕（卷十）

七夕はないかのよと讀む、同卷に一年爾七夕耳相人之云々などみゆ。七夕をたなばたとよむは後俗のわざなり。たなばたつ女とは女星にて、其の彦星に逢ふ夜なるを、七夕の字を只たなばたとよみては理りなしといへり。古書を見むにはかく心得てよむべきは勿論なれど、二星の逢ふ夜なるを、此く女星の方の名をとりて此の夜に被はしたるも、偏に其の果敢なき戀を憐む意にて強ち後俗とのみ云ひかたからむ。要するに古今の別を違へまじとなり。

天河遠度者。無友。公之舟出者。年爾社候。

あまの川とはき渡りはなけれとも
　きみかふな出は年にてそまて

ことわり明らかに、よくとゝのひたる歌なり。星合の傳說は、支那文學に伴うて入り來れるものにして、是等の歌は全く歌人の構思に出でたるものなれば、眞情の熱注したるにあらずして、風な吹きそ、浪な立ちそなど兎角漆桶を脫せぬが多き中に、此の首の如きは比較的に俗氣少き歌なるべし。

故鄕豐浦寺之尼私房宴歌（卷八）

此の歌原集三首あり。初一首は丹比眞人國人の歌としるせり、此に擧けたるは尼の歌なり。此の寺の名は『持統紀』『光仁紀』などに見ゆ、其初は推古天皇の皇后豐浦宮と申せしを其處に建られし寺故に、さか名け、且故鄕ともいへるなり。或は云く豐浦宮は餘りに上世にして、時世隔たりぬれば、今更故鄕といふべからず、右の國人の歌に『飛鳥川ゆきゝの岡の秋はきはけふ

降雨にちりか過なん』とよめるを思ふに、飛鳥はやがて此の寺にちかゝらん、さらば近き世にふる郷となれる、飛鳥藤原などに近き故に、去か故郷の豊浦寺といふなるべしと。

鶉鳴古郷之秋芽子乎思人共相見都流可聞

うつら鳴くふりにし郷の秋はきを
おもふ人とちあひみつるかも

共はぞ、ちと訓むなり、卷十に念、共をたもふ、とちとよめるがごとし。可聞は中世よりかなといふに意同じ。但しかもに三つあり、即ち感嘆詞、希望詞、疑問詞なり、此には感嘆詞に用ゐる。鶉は人遠き野らにすむもの故、さとのいと荒れて野となれる意を強くいはんとて冠らしめたるなりとぞ。

只今唯有鷓鴣飛なぞいへると同じ趣にて、蕭條たる故都、細雨蕭々として秋萩廢瓦にてぼれ、古王臺上閒として人無く、日亭午にして空しく老鶉の

鳴き上るに任す、烏帽の散官人、緇衣青裙の老沙彌尼と机を隔てゝ相語り、顧みて此の光景の寂莫たるを見る。沙彌尼は、是れもと恩を承け寵に浴したる當年歌舞の伎女にあらざる莫きを得んや、此の歌、自ら是れ一幅の繪畫、而して其の幽微曲折知るべし。思人共とは、同じく前朝の遺臣を云ふ。從前の解釋皆此に見徹せず。

歌（卷二十）

歌の左に右歌六首兵部少輔大伴宿禰家持、獨憶秋野、聊述拙懷、作之、とあり。此の萬葉集裏書傍書につきて、眞淵の論あれど、开は前にも述べたれば此には省きぬ。

宮人乃蘇泥都氣其呂母安伎波疑爾仁保比與呂之伎多加麻力能美夜

みや人のそでつけ衣秋はきに
にほひよろしき高圓の宮

蘇泥都氣衣は、卷十六に結幡の袂着衣ともいへり、官服は皆端袖を着れば、此くいふとなり、『續日本紀』に袖口の幅は八寸以上、一尺までなる制あり、長さには制見えねど、奈良朝以前の袖は狹くして長かりけんこと證ありて、今は既に明かなる事實とせり。安伎波疑爾、仁保比與呂之伎は、卷十に吾衣摺有者不在、高松之野邊行去者、芽子之摺類曾など見ゆ、萩の花のいろの衣に移るをいふなり。高圓山は春日の地の中にあたり、志貴皇子の御家のありし所、或は又元正天皇の離宮もやありけんといふ。

前に出てたる加吉都播多の歌といひ將た此の歌の如き情を摹し景を寫し襟期潮灑、跌宕流麗の致有り。

同

秋野爾波、伊麻已曾由可米、母能乃布能、乎等古乎美奈能、波奈爾保比見爾

秋野には今こそゆかめものゝふの

をとこをみなの花にはひみに

ものゝふは男てふ詞に冠らせたるのみ。乎等古乎美奈能波奈は、男花、即ち尾花と、女郎花なりといふ。此集に須々志競とよめるは壯士とものいさみあらそふをいひ、草の須々幾も、物より殊に高く抽てゝ雄々しきさまなれば名を得たるものにして、まことに男花なりといふべし。以上は眞淵の說の大意なり。

千蔭は之れに反し、薄を男花、をみなへしを女花といふべしとは恐くは强ごとならんといへり。此歌の乎等古乎美奈といへるは草の名にあらずして、男女うち交りて行くとなりと、又母能乃布能の冠辭は、八十伴緒、八十をとめらともつゝけたれば、男女にわたることなり、男といはん料とのみいふべからずと論せり。

男女うち交りて、波奈仁保比見爾今こそゆかめてふ意なりとは、表面より

見たる正しき解なるべし。唯辭を棄て情を先にしていへば、眞淵の如く高圓の秋野の上の朝霧漸く霽れ、十里の平原、秋色錦の如く、尾花秀て女郎花なまめき、萩、桔梗など濃く薄く彩りたるおもいはぬさまなるを今こそゆきて見ましといふの、趣あるに如かざるなり。

同人（卷八）

三首の中なり、歌の左に『天平十五年癸未秋八月見物色作』とあり。

掉牡鹿之朝立野邊之秋芽子爾玉跡見左右置白露

さをしかの朝たつ野への秋萩に

玉とみるまでおけるしら露

牡鹿二字を唯さかとのみよむことゝするは、此集に狹尾牡鹿、佐小牡鹿などと書けるにて知るべし。さは發語なり。

眞淵は此歌を評して云く、まはき原の朝露さなから玉を敷みてゝわさやかなる野に、鹿の立らんけしき繪にもうつし得かたしと。まことと寫實の佳き歌なり。

同人（卷十七）

越中の國守せるころの歌なり。

氣佐能安佐氣秋風左牟之登保都比等加里我來鳴牟等伎知可美香物

けさのあさけ秋風さむし遠つ人

雁か來なかん時ちかみかも

けさは今朝の畧、あさけは朝明の中畧にて、同しことなから、くはしくをり立てゝいふには、かさねるなり。

遠つ人かりとは胡國より文をつけて來してふもろこしの古ことに依りて、雁を遠き使人としていふなり。人麿の遠つ人獵路の池とつゝけしなどをとりしなるべしと、眞淵はいへれど、千蔭は遠つ人は冠詞と註したり。此

の卿の歌に『雁金は使ひにてんとさわくらん秋風さむみその川の邊に』といふもありて、强ち李廣の故事の心を含まざるにわらざるべけれど、此には單に遠つ人といひたるのみにて、使ひの意味は見わず。況んや此に遠つ人といへるは自ら況したりと覺しく、眞淵のいへりし如く、京なる思ふ人を指したるにあらざるをや。彼の『かりかねは使ひに來んとさわくらん』の詠は京を思ひての作なれど、此れなるは、秋早く肌寒き胡地遠征(時に越中國守たり)の冷かなる宦情を抒べたるなり。

詠鹿鳴（卷十）

鹿鳴と書きたるは毛詩の字によりて、去かはつゝけたるなり。

山邊爾射去薩雄者雖大有山爾文野爾文沙小牡鹿鳴母。

やまのへにいゆくさつをは多かれと
やまにも野にもさをしかなくも

いゆくのいは發語なり、渡るをいわたる、立すをいたゝすといふ類ひなり。

薩雄は幸男(サツヲ)なり、山の幸、海の幸などの語思ふべし。

この次に山邊庭、薩雄乃禰良比恐跡(カシコミト)小牡鹿鳴成、妻之眼乎欲焉(メヲホリ)とよめるに對へて見れば、今もさつをゝば恐るれど、つま戀に堪へずしてなくとよめるなるべし。此れは眞淵の解なり。

されど薩雄を恐る、妻戀に堪へずなどいへる、有情的の見解を去り、四山の紅葉、半天の錦をかざり、白露凝りて滿地の霜となるの朝、野に山に、いゆくさつをの打扮凛々しく眞萩原をむねわけして、さつ矢たはさみ、彼方此方に獵り狙ふさまの壯美に、可憐の棹牡鹿の此くとも知らで、無邪氣に呑氣に、彼方に群れ、此方に散りて、木の葉、草の實などあさり居るさまを反映せしめて、とりなし面白くよみ出てたる良工の苦心を思ふべきなり。

詠水田（同卷）

水田とは火田、即ち畑ならぬをるしにかくかけるにて、田のことなり。

左小牡鹿之、妻喚山之、岳邊在、早田者不苅、霜者雖零。

さをしかのつまよぶ山の岡邊なる
わさ田はからし霜はふるとも

早田は、大かたの田面に、早稲(ワセ)、晩稲(オクテ)つくるとは異にして、山岡の邊りなゝめなる所には、たのつから山のしつくをたのめば、專ら早穂をつくるものなりといふ。

物わさる便りなから、鹿の岡邊の小田に出て、妻戀ふ聲のわはれさ堪へかねて、早くより収むへき早穂なれと、霜たくまても苅りやらしとなり。此の歌も詩經の寡婦之利なといへる思想の混入したるにもやなど、初めは思ひたりしが、よく見れば全く渾成せる俚謠などの姿にて、學人の搆思に出でたる人工的のものにあらず。眞淵翁のいへりし如く、歌はたゝ幼かれと

の敎への眞理ならば、是等は眞に古歌の粹といふべきものなるべし。

詠花（同卷）

眞葛原、名引秋風、吹毎、阿太乃大野之、芽子花散。

まくす原なびく秋風ふくことに
あたの大野のはきの花ちる

阿太の大野は、和名抄に大和國宇智郡阿陀と見ゆる是れなるべく、萬葉集卷一に天皇遊獵內野の歌に內大野とよめるも、宇智郡に在る大野故にかくも稱ひたるにて、阿太乃大野てふ固有名詞にはあらざるべし。

葛は葉廣なれば、なびく秋風とよみたるにて、此の歌見るが如きけしきなり。

献弓削皇子歌（卷九）

三首の中なり、又此の卷、他に此の皇子に献る歌ありて、左に人麻呂家集出

とあり、此の歌よみ人も、出處もさられねど猶歌のさま人麻呂家集めきたり。

佐宵中夜者深去良斯雁音所聞空月渡見。

さよなかと夜は更ぬらし雁金の
聞ゆるそらに月わたるみゆ

佐宵の佐は發語なり、小狹などの意なるもわれど、か樣に用ゐるには其の意なし。

さよなかは、單に夜半といふ意なれば、既に深けたる夜なり、月渡るは月の東山より出て、西山へ過ぎゆくをいふなり、月のやゝかたふける方に、雁の鳴きたるげに物しつかにあはれもまことにして、且夜のふけたるもさるさそらの樣なるをもて、かくよめるなるべし。卷十に『此の夜らはさよふけぬらし雁かねのきこゆる空ゆ月たちわたる』といふ歌出でたれど、空ゆ立度るもわざとらしく聞ゑて、聞ゆる空に月わたる見ゆの自然に及ばざるなり。

詠月（卷十）

白露乎玉作有九月在明月夜雖見不飽可聞。

さら露を玉にあしたるなか月の
有明の月夜みればあかぬかも

別に解釋を費さずして意義の聞ゆる歌なり、秋露如珠、明月如珪などいへる漢文直譯にして、所謂優孟衣冠なるもの、詩として幾くの價値たになし。

冬

誅黃葉（卷十）

萬葉には、もみぢばを專ら黃葉と書き、たま〳〵赤葉ともあり。

八田乃野之淺茅色付有乳山峯之沫雪寒零良之。

やたの野のあさぢ色つくあらち山
峯のあわ雪さむくふるらし

八田野は、『神名式』にも『和名抄』にも大和國添下郡矢田とある是なるへし。有乳山は越前國敦賀郡にして、昔時愛發關ありし所なり。今もあらちといひて、高くさかしき山路ありといふ。又八田も仝じく越前に在りといふは後人の此の歌により附會したるなるべし。

大和にある矢田野のあさぢの紅葉せるを見て、越のあらちの山に、今こそ雪のあるらんと思ひやりたるなり。良人などの于役せるを思ひてよめるにもやあらん、思深く情こもれる歌なり。これと類歌は、仝し歌に『吾宿の淺茅色付吉魚張（ヤナバリ）の夏身の上に去くれふるらし』といふあり。

冬雜歌（同卷）

三首の中なり。歌の左に右柿本朝臣人麻呂之歌集出也、但一首或本云三方沙彌作と。去かるに此の三首の中『卷向之檜原毛未雲居者（クモヰ）子松之末由沫雪流（ナガル）』の歌を新古今集に家持の歌として、『眞木むくのひはらもいまたくもらねばとなほし春の部に入れられたり。あはゆきとはいつにてもよむを、『新古今集』の頃には春のことばとのみなりたれば、春の歌と誤られしにや、歌主を家持としたるも、例の獨斷なり。

足引山道不知白杜枝枝母等乎々爾雪落者。

あしひきの山ちもさらす白かしの
えたもとをゝに雪のふれゝは

歌の左に或云枝毛多和多和と註せとも、元暦本には無しといふ。白かしは『古事記』『日本紀』にも多くありて山中に生ふる木なり。

深き山路に雪にあひて、たつきもしらぬさまなり。且檀は葉ひろなれば、雪のかゝれるさまのことなるものにて、深き山の木なれは、其のところのさまもおもひやらる。千峯萬嶽見るかぎり白皚々として、玉鉾の道もわかぬに、網代笠の大あるを戴きて、墨染の法衣、裾高らかにかゝけたるが凍る手許に拄杖を確と握り枝もたわゝに打ち傾ける檀の下蔭に暫し寄り添ひて立ちながら憩ひたる情景げにも躍出するを覺ゆ。此の詩或云三方沙彌作とあるを思合すべし。

相聞

男女の思ふ意を互につけ聞ゆるをいふ。然ればあひきこねとよむなり。後の集の戀部てふに大むねは同じ。唯兄弟姉妹などの相思ふ歌の此中に入りたるもあるを異とするのみ。

大津皇子賜石川郎女歌（卷二）

皇子の傳は『懐風藻』に出てたるもの、人のよく知る所なり。云く皇子者、淨御原帝之長子也、狀貌魁梧、器宇峻遠、幼年好學、博覽而能屬文、及壯愛武、多力而能擊劍、性頗放蕩、不拘法度、降節禮士、由是人多附託云々と。帝の崩するや、縞に不軌を圖り持統帝の元年十月二日事顯はれて死を賜ふ。此の石川郎女と贈答のことも、先帝の御周忌は未た終はらぬ程、忍びにありけることなるべしといふ。

足日木之山之四付二、妹待跡、吾立所沾山之四付二、

あしひきの山のしつくに妹まつと

わか立ちぬれぬ山のしつくに

山のしつくとは、必ずしも山の滴りならずとも、木の下露などなるべしと眞淵はいへり。心はかくれたることなし、たゝ山のしつくにぬれて待つといふのみなれど、必ずしも精深ならずして、自然に佳妙なり、是れ氣韻の同じからざるに由る。

石川郎女奉和歌

郎女の傳は見ゆるところなければ明かならず、郎女の訓は『垂仁紀』に播磨日郎姫（郎姫此云異羅茂比咩）とあるに同し。

吾乎待跡、君之沾計武、足日木能、山之四付二、成益物乎、

あをまつと君しぬれけん足曳の

山のしつくにならましものを

かくと知らば、其の山のしづくとなりて、君につかましものをとなり、『かくはかり戀つゝあらは朝に日に妹がふみなんつちならましを』などいふ類なり、願爲輕羅などいへるも同じ心のせちなる趣なれど、これは自然物より言ひかけたるだけ野鄙ならで、おもしろく、古人の淳朴なる心性も面り見ゆる心地す。

寄草（卷七）

何に寄てふ歌は、其の物を借り寫して譬歌の如くよめると、其の物は少しく舉けて、やかて便りに、己が思想をいへるとあり。されど共に『詩經』の比興の体より來れるものなるべけれど、彼我互に言語のさま異なるのみならず、短歌は僅々三十一音の中に複雜なる思想を言現さんとしたるより、後には無理なることも出來て、一種の謎語の如き形となり、詩品を墮したる

こといと多かり。

鴨頭草丹。服色取。摺目伴。移變色登。備之苦沙。

つき草にころもいろとりすらめども
うつらふいろといふがくるしさ

鴨頭草はつき草、俗につい草なり。『江家次第』に鴨頭草移二帖とあるを考へ見るに、むかしも奈良朝あとには、つき草の花を紙に拓し置きて、又衣にすりけるにやあらん。

讀人さらず、女の歌と見えたり。男のいはんまゝに許さずとにはあらねど頼み難きは男心の常と聞けば、うけひかずとの意を、月草の花もてすれる衣の色のうつろひやすきにたとへたり。寄托遙深、怨んで怒らず、此の歌の如きは、題詠摸古の迹なくして、自ら人情に切なり。

寄木（同卷）

白菅之。眞野榛原。心從毛。不念君之。衣爾摺。

さらすけのまぬのはぎ原心ゆも
思はぬ君かころもにすりぬ

此の榛と芽子との異同につき論あれど、此には畧す。卷十に夏詠榛の題にて『思子之。衣將摺爾爾保比興。島之榛原。秋不立友』とあるによるも、秋季花を着くる植物にして、野邊を分けゆくに、自ら衣に色つくものにて他の多くの塲合に芽子と書きたる萩のことなるべしと思はる。寄木とあるに疑を置くものあれど、今は拘はらず。

萩原を分れは覺えず衣に色つく如く、ふとしたことの緣となりて、思ひもかけず、うれしき契りを結びしてふ心を歌ひたるなり。痴態嬌怯にして、姿韻共におもしろき歌とす。

寄花（卷十）

外耳、見筒戀牟、紅乃、末採花乃、色不出友、

よそにのみ見つゝや戀おん紅の
するつむ花の色に出ずとも

紅は呉藍（クレアヰ）なりといふ、之れを末摘花といふは、莖の末なる房の中より小き鶏冠（カツアヰ）の樣にて咲出るを摘みとるなり、故に末摘花といふ。

卷十一に『忍ひには戀て死ぬとも御園生の鶏冠花（カツアヰノハナ）の色に出めやも』といふに同じ。後世の忍戀てふ題の心なり。

寄物陳思（卷十一）

紅之、禰引道乎、中置而、妾哉將通、公哉將來座、

くれなゐのすそ引道を中におきて
われやかよはむ君や來ますむ

女の歌なれば、紅のすそ引とよみ、妾とかきたるなり。相かよはんにさのみ障

りなき中にての歌なるべし。女のかよへることも當時はありける風俗なり。

譬喩歌（卷十）

譬喩歌といふも亦比興の体なり。眞淵云く是は表は他（アダ）し物をよめる樣にて、打かへて、みれば戀のこゝろなり。其の中にも、それには思ふ心をかつ〳〵あらはしたるものなきにあらず。『古今集』序の註にいへるは、ひとへにのみ思へるなるべし。又此集譬喩歌と有るは皆相聞也と。譬喩歌の左に右寄何、喩、思と註したるがあり。

橘、花落里爾、通名者、山霍公鳥、將令響鴨。

たちはなの花ちる里に通ひなは
山ほとゝきすとよもさんかも

此の歌を故郷をしのぶ意ならんと釋したる人もあれど、并は『古今集』の『昔

の人の袖の香そする』といへる歌より思ひよれるにて、萬葉時代には、かゝる思想のなかりけるを顧みざる論なり。

秋萩を鹿の妻てふ如く、橘に郭公をあるじの樣にいへり。されば『古今集』に『秋はきにうらふれをれば足引の山下とよみ鹿のなくらん』とよめる類にて、橘の花ちる里に行きなば、郭公の妬みてなきとよまんてふを表に、妹が里に通ひなば、里人の言痛(コチタ)くいひさわがんかと譬へたるなり。

理樸にして辭輕く、古を觀るべき歌なり。

寄鳥（同卷）

霍公鳥來鳴五月之短夜毛獨宿者明不得毛。

ほとゝきす來鳴さつきの短夜も
ひとりねぬれはあかしかねつも

此の四の句、後の集にひとりしぬれはとして入たるは、いよゝ詞のうつくしけれど、獨宿者と書たるに、毛の助辭はそへかたしと眞淵はいはれき。

『古今集』の『ほとゝきす鳴やさ月のあやめ艸あやめもしらぬ戀もするかな』は、嬌媚逼り來りて讀者を神醉せしむる樣なれど、いかてか此の歌の清腴に及ふべけん。

寄物陳思（卷十一）

かく題を擧けて記せる數首の末に此の歌あり。此の歌は人麻呂家集に出てたるものにもあらねば、もとより人麻呂のよめるにあらざるはいふまでもなきことなり。

足日木之山鳥乃尾乃四垂尾乃長永夜乎一鴨將宿。
あしひきの山鳥の尾の毛たり尾の
なか〳〵し夜をひとりかもねむ

庭津鳥可鶏(カケ)乃垂尾(タリヲ)乃亂尾(シタリヲ)乃長心毛不可念(オモホエズ)鴨なといへるに全じく、長しと

もいふことの冠詞に足日木の云々とつけたるは、長してふ心を表はすに、最も適したり、是れ調にありて意にあらず。上の句は譬をかねたりと思ふ人もあるべけれど、玄からざるなり。歌のうたふものたるを忘れ、見るものと思ひて、專ら意を以て迎へ解する過なり。

笠女郎贈大伴宿禰家持歌　（卷三）

三首の中なり。郎女姫など他にもあれば郎女なるべきを、書き誤まれるなり。

陸奥之眞野乃草原。雖遠。面影爲而。所見云物乎。

みちのくの眞野のかや原とはけれど
おもかけにしてみゆとふものを

眞野のかや原は『和名抄』に陸奥行方郡眞野と有り、こゝの野なるべし。みちのおくなる所すら、一たび見しより後は、面影にしてみゆといふものを

をの意なり。當時此の如き傳說のありたるなるべし。相逢ふ坂の關はへたてあれど、れもかけにして、我はわすれずとなり。

寄物陳思　（卷十二）

左檜隈。檜隈河爾。駐馬。馬爾水令飲。吾外將見。

さひのくまひのくま河に駒とめて
こまに水かへわれよそにみん

檜隈川は、和名抄に大和國高市郡檜前（比乃久末）とある是れなり。左は例の發語なり。

後朝の歌とせる人もあれど、必ずしも後朝の心ならずとも、詩情の見つべきならずやは。こまに水かへかし、よそにすらみんものをと、思ふにこれ將た閭巷の歌謠ならんか。樂んで淫せざる趣あり。

寄鳥　（卷十）

春之在者、伯勞鳥之草具苦、雖不所見、吾者見將遺、君之當裳、

春されば もすの草くき見えすとも
われは見やらん君かあたりを

もすの草くきは、草くゝりあり、具利の反り吉なればなり、藤波に花をたちくゝはとゝきす、又あし引の木間立八十一はとゝきすといふも立くゝるなり、『古事記』に血自手股漏出所成神名訓漏云久岐云々なと見ゆ。

春深く草長して、伯勞のくゝりで物あさりすれば、其の容のさだかに見ねぬが如く、我が意中人の聲ばかりして、姿はしかとわかねども、我れは尙見やらんとなり、桑間濮上の歌にて、野らに出で村人うちまじりて農事などする中に、思ふ男の居るなれば、伯勞に寄托してかくよみ出でたるなり、蕭々鳩羽、集于苞栩、王事靡盬、不能蓺稷黍、父母何怙、悠々蒼天、曷其有所、と比興の似たる點なきにあらざれど、此の歌は女子の詠にて、さばかりこみいりたる思想としも覺ゆず、『君かすむあたりは遠ければ、みるに見ねねとも、なつかしければ、猶みやらん』といふ意なりと眞淵の釋したるは、巧にして却つて失せり。

寄物陳思　（卷十二）

御獵爲、雁羽之小野之、櫟柴之、奈禮不益、戀社益、

みかりする狩場の小野のなら柴の
なれはまさらて戀こそまされ

櫟柴はなれの冠詞として用ゐたれば、ならしばなるは論なけれど、櫟は『和名抄』に以知比の訓ありてならとよむはいかゝとの說あれど、今はたかゝはらず、雁羽は狩場の借字なり。

これは男子の歌なるべく、其の御獵の供奉して狩場にゆきたるが、思ふ心の絕間なく、櫟柴の蔭なとに慰ふをりしも、ふと物に感じて、忽ち宿昔我戀

のまゝならぬを悲しみ、『なれはまさらで戀こそまされ』とよみたるなるべし。われより位貴き貴人の郎女などに契りて、思ふ如く逢ふことの叶はぬを嘲うさなり。寄物陳思といへれど、大むね即興の吟なるべく、題によりて文字をつらねたるにあらぬは言ふをまたず。

大納言大伴卿和歌（卷六）

大宰府より京へ上らるゝ時、ある娘子の贈る歌に答へたるなり。集中に和歌といへるは、みな贈答の作にて、返へしの歌なり。此の歌の左に『右太宰帥大伴卿、兼任大納言。向京上道。此日駐馬水城。顧望府家。于時送卿府吏之中。有遊行女婦。其字曰兒嶋也。於是娘子。傷此易別。嘆彼難會。拭涕自吟。振袖之歌』とあり。卿は則ち旅人卿なり。

大夫跡念在吾哉水莖之水城之上爾泣將拭

ますらをと思へる我や水くきの

みつきのうへになみたのこはん

大伴家は、天押日命の後にて、代々武功の家なれば、大夫跡念在吾とよめるも偶然ならざるべし。さりながら此の歌はとりいでていふべき程のものならず。眞淵の之れを取りたるは、好む所に阿るのそしりなき能はず。

越前國椽大伴宿禰池主來賜歌（卷十八）

安必意毛波受安流良牟伎美乎安夜思苦毛奈氣伎和多流香比登能登布麻泥

相思はすあるらん君をあやしくも

なけきわたるか人のとふまて

家持の越中守たりし時、越中椽なりしが、後越前に轉任して、家持に寄せたる歌なり。端書に、以今月十四日到來深見村望拜彼北方常念芳德何日能休。兼以隣近忽增戀加以先書云暮春可惜促勝未期生別悲兮夫復何言臨紙悽

斷。奏狀不備と。而して三首の歌、一は古人云、次は屬物發思、末は所心歌と標し、家持の答歌にも答古人云、答屬物發思云々とあり。古人云とあるにより、三首とも古歌の意に叶へるを書きて贈れるなりとの說もあれど、いかゞ。安必意毛波受一句突出人を驚かしむ。

寄河（卷七）

廣瀨川。袖衝許。淺乎也。心深目手。吾念有良武。

ひる瀨川袖つくはかり淺きをや
心ふかめてわかもへるらむ

五の句をおふふらんといはで、もへるらんとよむは、萬葉にても、奈良の朝にては二樣によみたれど、おもふを略して毛布といへるは古例なりと異淵はいへり。『土佐日記』にすら、さる語あれば、貫之のころまても略していひけん。廣瀨川は『天武紀』に祭大忌神於廣瀨河曲と見ゑたる是れなるべし。

川瀨をわたるに、たれたる袖のはしのやゝ着くはかりあるは、いと淺き水のさまなり。自ら嘲る歌なり。情痴の極なり。

陸奥國前采女歌（卷十六）

歌の左に右傳云。葛城王。遣于陸奥國之時。國司祗承緩怠。異甚。於時王意不悅。怒色顯面。雖設飲饌。不肯宴樂。於是有前采女。風流娘子。左手捧觴。右手持水。擊之王膝。而咏其歌。爾乃王意解脫。樂飲終日。と。

安積香山影副所見山井之淺心乎。吾念莫國。

あさか山かけさへみゆる山の井の
あさき心をわかおもはなくに

安積山は陸奥國安積郡の山なり。此の歌は難波津の歌といもに、歌の父母のごとく、手習ふはしめにもせしものなれば、更に解釋を待たじ。

あにてともなけれど、音節のとゝのへる歌なり、此は頭字韻を用ゐたるゆ

もよるなるべし。わが思はなくにはあが思はなくにの方よろし。

羇旅

大行天皇幸吉野宮時作（卷一）

三首あり、此に擧げたるは長屋王の歌なり、王は天武帝孫、高市皇子之子也と見ゆ、大行天皇は文武天皇を指したるなるべし、大行は周禮に大行人、小行人、主諡號官、漢書音義に大行、不在之稱、天子崩未有諡號、故號大行とあり此の歌慶雲三年六月帝崩しまし〳〵てより、仝十一月諡號奉りし間に、何人かの家集に記し置きたるを、こゝに擧げたるなるべし

宇治間山朝風寒之旅爾師手衣應借妹毛有勿久爾

うちま山朝風むさしたひにして
衣かすへきいもゝあらなくに

宇治間山は吉野の山の一つの名なるべし、契冲師は吉野の路次なるべしといへり。此の集の歌『詩經』の想に酷似したるが多きが中に、此の歌、及び赤人の『秋風の寒き朝けをさの丶岡越ゆらむ君にきぬかさましを』など、衣かすてふと屢見ゆ。秦風の無衣は、秦人の其の君攻戰を好み、屢〻兵を用ゐて民と欲を同うせざることを刺るに出つれど、其の豈曰無衣、與子同袍、王于興師、修我戈矛、與子同仇といへれば、是れ衣かしなから其のスパルタ的の民風を見るに足らずとせず。萬葉集中の君に衣かさましといへるが如き其の諷刺の旨と渉るなきは、言ふを待たず、吾國民の心情は、さる圭角ある性質を有せざりしと、社會事情の自ら殷然として異るものありて、此の如き政治的諷諭の詩を生せざりしと共に、是等の詩賦を消化し、其の華を採り色香を損せざる妙悟ありて、與子偕行てふ強烈なる原語の音響も、渾然融和して、君に衣かさましてふ靄然たる神韻を發し、夫唱婦和の頗ひなき愛思

を寫す語となれりしなり。されば其の里閭男女の口より出てたるものは、或は偶然の一致とも見るべけれど、文學の素養ある貴族の歌の多くは『詩經』などより轉化し、其の思想混入したりとするに何の疑ひあらんや。

海邊望月作歌（卷十五）

九首の中なり。天平元年六月たちて、新羅へゆく使人の、秋の頃筑紫に到りて、海邊の月をよめるが中なる一なり。

由布佐禮婆、安伎可是左牟思、和伎母故我、等伎安良比其呂母、由伎豆波也伎牟。

ゆふされば秋風さむしわきもてか
ときあらひ衣ゆきてはやきむ

夕さればは夕べなればの義。

月夜に舟を泊して、砧なときゝてよめるなるべし。衣からざれば、とき洗衣

の語唐突にして、情切ならず。何時か君命を辱かしめず、事なく歸り來て、妹が心を慰めんとなり。凡そ歌を解するに、其の情を推し測りて之れが境を思はずんば、決して其の眞意の在る所を會得する能はずして、從前解釋の飯飼文字徒に齷齪餃餡の態なき能はざる所以なり。

引津亭船泊之夜作歌（同卷）

これも右の使人の歌なり。引津は筑前に在り。

安麻等夫也可里乎都可比爾衣氐之可母奈良能彌夜古爾許登都礙夜良牟。

あまとぶや雁の使ひにねてしかも
ならのみやこに言告けやらむ

此の歌を『拾遺集』に人麻呂の歌として出せるは例の誤謬なり。俗歌なり。

柿本人麻呂羇旅歌（卷三）

人麻呂の名は國史に見ねば、是亦萬葉集中にのみ不朽を托せる人なり。續日本紀には全く別人なり。此の人正三位なる由、古今序にあるは僻言なり。集中に二處まて死といへれば、五位に至らぬ人なるは明かなりとす。三位以上に薨と云ひ、四位、五位に卒と云ひ、六位以下、庶人に至るまて死といふ、令條、古史、萬葉等同一なり。其の挽歌に徵するに、草壁皇子尊の舍人なりけんも、大舍人なるべし。內舍人はあとがら重ければ也。石見の國官は守正六位上、介從六位下、掾正八位、目大初位迄なり、石見に宦遊せし時は、其のいづれなりしかは詳かならず。大凡詩人の窮多くして達少きは、古今東西其の嘆を等うする所なれば、人麻呂ぬしも、やかて窮して愈〻工なる數には洩れで、其の歌の四季、戀などの少くして、羇旅、挽歌は世に類ひなきもたゝことにあらず。

粟路之野島之前乃濱風爾妹之結紐吹返

あはちのぬしまの崎のはまかせに
いもか結ひしひもふきかへす

八首の中なり。あはぢのと四言によむべきなり。古歌に四言の句珍しからず、うたふときは辞をひきて五言の調をなす故と眞淵はいへり。後世あはみ、ちのと讀み淡海路のことゝ誤まれるは此の原歌八首を汎く通讀せざる過ちなり。此の歌皆瀬戸内海にてよめるなり。

妹が結ひし紐てふ語、集中多く見ゆ、必ず下紐とのみ思ふはひがことなり。『古事記』聖仁天皇の條に問其后曰汝所堅之美足之小佩者誰解云々とあるなどを證として、古は夫の衣の紐は妹が結ぶことにありたりなど定むるは、よく思はざるに座す。詩歌は感情を主として、事實を紀するものにあらず、古歌は古事を撿出する適好の資料なれども、又其の取捨を知らざるべからず。

黯然として、魂を銷するものは、唯別れのみ。此の歌、妙に暫離の狀を摹し、永訣の思を寫せり。

『古今集』に『わかせこが衣のすそを吹かへしうらめつらしき秋のはつ風』といへるは此の歌より奪胎したるならんも、此れは世間別れを重んずるの感を述べ、彼れは家庭愛に醉ふ趣を盡して、同工にして異曲なるものと謂ふべし。

同八首の中

天離夷之長道從戀來者自明石門倭島所見

天さかるひなのなかちゆこひくれば
あかしのとよりやまとしま見ゆ

八首の中なり。西の國より大和の京(藤原なり)へ歸るに、播磨の明石の迫門をこき入りて、大和の山の見ゆるをよろこびたるなり。されば此の迫門よ

り生駒山のみゆるといひ、將たやまと嶋は播磨の一島の名なりなど爭ふは、皆歌てふものゝ何たるを知らざるに坐し、殊に感情の狂烈なる人麻呂の歌を、よく讀みわけざるに由ることなり。戀來者といふに一篇の主意存することにて『靡け此の山妹が門見む』など、人麻呂の面目躍出するを覺ゆれば、此の歌に於ても、必ずしも、大和の山の見ゆるといふにあらで、其の感情の昂狂を表はしたるまてなり。一本に『家乃當所見』に作りたるは、倭島所見の語の事實を得ざるを恐れて、此くもやあらむと改めたるなるべく、玉を毀ちて瓦礫となす類ひなり。

同人下筑紫時海路作歌　（同卷）

此の人の筑紫に下れるは、臨時太宰府などへ遣されたるにもやといへり。

二首の中

名細西寸。稻見乃海之。奥津浪。千重爾隱奴。山跡島根者。

なくはしきいなみの海にれきつなみ
ちへにかくれぬやまとしまねは

名くはしきは名高く聞えなれたるをいふ。委しとは花くはし吉野、いすくはし鯨、美女をくはしめ名馬をくはしまてふごとし。此の歌も、都のかたの山のみる〳〵白浪のみ千重に立つゝきてある千重立浪にかくれぬと、名殘り思ふ情をばいはで、唯景のみの勢ひあるいひあしは、人麻呂の特長にて且其の『ちへにかくれぬやまとしま根は』と倒置法を用ゐ、格調自ら高きを致したり。

下野國防人梁田郡上丁大田部三成歌　（卷二十）

國郡に軍團を置かれたる際、兵士の京へ參るをば衛士と云ひ、年毎に交代し、太宰府へ遣はさるゝを防人と云ふ。三年にて替らしむ。筑紫の海の崎々を守るが故にサキモリといふ。太宰府へは遠江國より以東の兵士を出さ

しむ。此の歌の左に『二月十四日下野國防人部領使、正六位上田口朝臣大戸、進歌數十八首、但拙劣歌者不取載之』とありて十一首を載せたる中なり。丁はヨホロと訓みて、國造丁(クニノミヤツコノヨホロ)、主帳丁(カンノヨホロ)、上丁(カミノヨホロ)、助丁(スケノヨホロ)など見ゆ。使丁の義にして、足の胴(ホロホロ)によれる名なり。

奈爾波刀乎。己岐涅氐美例波、可美佐夫流。伊古麻多可禰爾。久毛曾多奈妣久。

なにはとをこきてゝみれは神さふる
いこまたかねにくもそたなひく

真率にして、亦樸を以て勝れり。神さぶるは神進(カミサブ)るにて、古蒼峭健などいへる義と同じく、形容詞に用ゐる。旅情のいとゝ凄涼たるを見るべし。

柿本人麻呂從近江國上來時至宇治川邊作歌（卷三）

今は大和國藤原の都へ上るとて、宇治を經るなり。さて此人近江大津の宮の時、そこに生れたるなるべし。よりて大津の宮のふるされしを悲しめる歌も多きならむ。且此は初めて上るにはあらで、藤原の都に仕ふるほと、歸寧の暇か、喪の暇なとにて下りて、今のはるならむと覺ゆ。

物乃部能。八十氏河乃。阿白木爾。不知代經波乃。去邊白不母。

ものゝふの八十氏川のあしろ木に
いさよふなみの行邊しらすも

不知をいさに用ゐたるは、集中いさや川を不知也川とも書ける例なり。いさよふ波は網代の抗のひまなければ、波のよとむを以て、去かいふなり。眞淵の『卷向(マキムク)之山邊響(トヨミテ)而。行水之三名沫(ナウノコトレ)如。世人吾等(ヒトノヨワレハ)者』てふは挽歌なれば意少しく異るべしといへるは、聞えたる說なれど（但し此の歌は挽歌にあらず懷舊の吟のみ）物乃部の歌を評して、『宇治川のあしろわたり興あるまゝに、てゝにいたりて、眺めをるに其のあしろ木に、せかれてたゝよへる波のゆくへもしらず流るゝ

を、人の世にあることも、玄かのみそと思ひとれるなり』といへるは、例の智解情量の沙汰にて、『無邊落木蕭々下、不盡長江滾々流』の句の如く、景を綴るの宏濶なる、湖山を呑吐するの氣ある本地の風光を認め得ざるものにて、しらずといへるが如き理想的の語あるより、曲解して、人世を歎じたる詩なりなど思へるは惑へるの甚しきなり。千陰の『近江の故き都べより歸るにつきて、殊に物悲しとも思はれしなるべし』と評し、『卷向』の歌と同じといひたるは、其の父、讎を復し其の子、劫を行ふ類なり。

臨時（卷七）

後の世の折にふれたるなど同じ。

今年去。新嶋守之。麻衣。肩。乃間亂者。許誰取見。

ことしゆくにひさきもりかあさ衣
かたのまよひはたれかとりみむ

肩のまよひは和名抄に袍（萬興布、一云興流）緒、欲壞也とあり、許誰は阿誰の誤ならんと宣長のいへるはよし。

時事をよめるなり、其の情を序いて、其の勞を閔れむは說ばしむる所以なり、說ばしめて以て民を使ふの心か。制彼裳衣、勿士行枚と旨異にして意同じ。

天平五年癸酉。遣唐使船發難波入海之時。

親母贈子歌一首。并短歌。（卷九）

此には短歌のみを擧く。此の時の遣唐使のことは、『續日本紀』に天平四年八月以從四位上多治比眞人廣成、爲遣唐大使、從五位下中臣朝臣名代爲副使、判官四人、錄事四人云々と見ゆ。此の人々の中の母なる人のよみたるなり。且此の一行の人の歌は卷五以下かつ〳〵みゑたり。

客人之。宿將爲野爾。霜降者。吾子羽衣。天乃鶴群。

たひ人のやとりせむ野に去もふらは
わか子はくゝめあめのつるむら

鶴に寄せたる、あはれ一層に深し。後世其角の女兒を哭する句「霜の鶴土に衣裳は着せられず」と其の情熱を同うし、落想亦相似たり。

羇旅作（卷七）

數々の中の歌なり、よみ人もしられず。

天霧相。日方吹羅之。水莖之。岡水門爾。波立渡。
あまきらひひかたふくらし水くきの
をかのみなとになみたちわたる

天霧相は、空のくもれるをいふ、千蔭は土佐國にて、日中に吹く南風をひかたといふ由去るせとも、眞淵は後世人、未申の風なり、辰巳の風なり、などいひて定かならず、今考ふるに『和名抄』に筑後國御原郡に日方の鄉あれば、其

方より吹く風を隣の國にてもいふにやと思へど、地のさまを知らねば、措きぬ云々、かく去るして扨後に四方の國々皆ありきて、殊に船の上のさまのくはしく去れる人の話ありとて、申酉の方の夕日のそはより吹くを船人の語に日方のよひかはりといひて、晩に其方より吹くは、強きものなから、暮過る程には、必ず弱るものと聞ける由いへり。近時此の語を詳らに解したる人ありし樣覺ゆれど、其の書手許に在らざるまゝ暫し記して疑を存す。

水莖乃岡水門は、『筑前風土記』に塢舸縣之東側有天江口、名曰塢舸水門、堪容大船焉。從彼通鳥旅澳名岫門（鳥旅等波多也岐也岫門久也）堪容小船と書けり、是れなるべし。其外『神武紀』『仲哀紀』等にも見ゆ。

天風浪々、海山蒼々、一の愁字を着けずして、旅況萬端、眼前に逼り來るを覺ゆしむ。

石川少郎歌（卷三）

『右今案石川朝臣君子、號曰『少郎子』』の十四字歌の左にあるは、後人の書加へし業なるべし。『續日本紀』を考ふるに君子と若子と別人にて、共に從五位上なるを以て、混同して一人となし、別號と誤認したるなり、況んや以上の二人は共に男子にして、此の歌は女の口つきなれば少郎は女郎の誤字なるべきこと明かなるに於てをや。

然之海人者。軍布苅鹽燒。無暇。髮梳乃小櫛。取毛不見久爾。
しかのあまはめかりしはやき暇なみ
くしけのをくしとりも見なくに

然之海人は『神功紀』にも磯鹿海人（シカノアマ）と見ゆ。『和名抄』に筑前國糟屋郡の鄕名に出て『風土記』には資珂島と書けり。くしけのをくしは、匣（クシゲ）の小櫛なるを、語のより來たるまゝに髮梳とは書きたるものなり。

此の歌の言葉を處々かへて『伊勢物語』に擧げたり。此の歌郎女が任に隨ひ筑紫に在る程の歌なるべし。たゞ此處の海人女かさまをよめるならむとの說もあれど、或は自ら況じたる戲歌にもやあらむか。

石河大夫遷任上京時。播磨娘子贈歌（卷九）

二首の中なり。

君無者。奈何身將裝。匣有。黃楊之小梳毛。將取跡毛不念。
君おくはなそみかさらむくしけなる
つけのをくしもとらむともはし

千陰はみよそはんとよめり。此の歌『自伯之東、首如飛蓬、豈無膏沐、誰適爲容』といへるに似たるよしは、早くより人のいふ所なり。萬葉集中處々『詩經』の思想混入したるは事實にして、吾人の屢〻擧げたる所なれど、此の歌は遊行女婦（アソビヲンナ）の類のよみたるなれば、固より偶然の一致なるべし。

以七月十七日選任少納言仍作悲別之
歌贈貽朝集使椽久米朝臣廣縄之館（卷十九）

家持の歌なり、端作あれど略す。此のつゝさの歌は、よく當時燕飲會同のさまを徴すべし、學者に裨補ある尠少ならず。

伊波世野爾秋芽子之努藝馬並始應獵太爾不爲哉將別

いはせのに秋萩をぬきうまなめて
初とかりたにせてやわかれむ

伊波世野は、『和名抄』に越中國新川郡石勢（伊波）とある處にある野なるべし。初應獵は、初鳥狩を義により書きたるにて、八月の小應狩をいふなるべし。秋萩をぬきは、分入る意なり。

攝津作（卷七）

此の前に山背作、芳野作など有る類にて一の家集に書きたる樣なり。

志長鳥居名野乎來者有間山夕霧立宿者無爲

しなかとりゐなのをくれはありま山
ゆふきりたちぬやとはなくして

攝津國河邊郡なる猪名野をいふなるべし、此の野のこと紀にも見ゆたり。『集中『苦しくも降來る雨かみわかさきさのゝあたりに家もあらなくに』の歌は妍秀にして孤冷なれど、此の歌の元氣渾淪、湊泊すべからざるに及ぶべくもあらず。

幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麻呂作歌（卷一）

持統天皇朱鳥六年三月御幸ありしこと紀に見ゆ。人麻呂京に留まりて行在のさまを思ひやりてよめる歌なり。三首盡く擧げたり。

嗚呼兒乃浦爾船乘爲良武嬢嬬等之珠裳乃須十二四寶三都良武香

あこのうらにふなのりすらむ乙女らか

あかものすそにしはみつらむか

嗚呼兒乃浦を嗚呼見乃浦と誤まりたるより、アミノウラとなし、卷十五に新羅に遣されたる使人等が詠詠したる古歌として再び此の歌を擧くる所に安胡乃宇良爾と、あれど、柿本人麻呂歌曰安美能宇良と註せり『仙覺抄』には、古本にはうみの浦にと點せしかと、右の註によりアミとよむことに定めたる由見ゆ。されど『和名抄』に志摩國英虞阿奚とある、即ち是れなるべく、又嫩嬬を都末度毛能と訓みたるわれど、卷十五に采女等良我と書きたれば、此にはそを正しとなしたり。

珠裳をおはかたはタマモと訓みたれど、卷十五に安可毛能となし、註に多麻母能と書きたり、されど此の註の後人のさかしらなる由は、安美能宇良の字につきて千蔭もいへれば、多麻毛の說も一概に從ふべきにあらず。だまといへば、單にほむる詞なれば、契沖の如きも、潮の滿きて裳のすそなと

濡すらんと思ひやりてよまれたるなりと單に字面の上より解釋し、毫も歌の情を顧みざるは惜しむべきなり。安可毛、即ち赤裳といひてこそ、しはのみちこむ、めつらかなるとりなし、人麻呂特長の技能にして、此の歌の印象分明なる所以なるべけれ。珠は赤き玉をいふなれば、おほよその語例に隨ふにもアカとよむべきなり。

釧着手節乃崎二。今毛可母。大宮人之。玉藻苅良武。

くしろつくたふしの崎に今もかも
たはみやひとの玉藻かるらむ

手節乃崎は『和名抄』に志摩國答志郡答志太布志と見ゆ。釧を劍と誤りて、タチハキノとよみたるは、謂れなし。

此の大宮人は男を云ふなるべし。

潮左爲二。五十等兒乃嶋邊。榜船荷。妹乘良六鹿。荒嶋廻乎。

ゑはさゐにいらこの嶋邊こく舟に
いものるらむか荒きしまわを

潮左爲は、潮の騷く義、和義（ワギ）の反は爲（ヰ）なれば、左和義を左爲といへり。伊良子崎は、參河國にて、志摩の手節崎と遙に相對せり。

いもは凡の女をはいはず、妻又は心かけたる女にのみいふは紀にも、萬葉にも云かり。されば末の歌は、其の意中の女の供奉せしを思へるなるべし。』赤裳に白浪、大宮人に藻苅、潮左爲に手弱女、三首の姿致を取れる着想皆凡ならぬを見るべし。

二年壬寅太上天皇幸于參河國時歌（卷一）

此の太上天皇は、持統天皇なり。此の歌の左に右一首長忌寸奥麻呂（ナガノイミキオキマロ）とあり。

引馬野爾、仁保布榛原。入乱。衣爾保波勢。多鼻能知師爾。
ひくまのに匂ふはぎはらいりみたり

ころもにほはせ旅の云るしに

引馬野は遠江國なり。榛と萩との異同につき論あれど、さのみはとて今は略しつ。秋はきのあて字なければ芽子とも、榛とも借りてかきたりといふに從ふべきか。

旅には專ら摺衣を着たる故に、旅のしるしにと詠みたりとの說はさもあるべけれど、拘はりては、却つて歌の情をなみする恐れあれば、此には、はきの花原を分けきて、衣に色つくを旅のかたみにせよの意とのみ見るべし。

響謝女王作歌（同卷）

同じ御幸のをり、京に留まり居て、背の君の旅のほとを思へるなり。

流經。妻吹風之。寒夜爾。吾勢能君者。獨香宿良武。
なからふるつまふくかせの寒夜に
わかせの君はひとりかぬらむ

流經は、夜の物のすその長きよりいふといへれど、荒木田久老は妻は雪の誤ならむと說かれたり。夜の物の裾ゆゑ、なからふるつまといへりといふも、肯ひ難き說なれば、誤字なるべし。

碁檀越(ゴダンオチ)往伊勢國時、留妻(トドマル)作歌　(卷四)

碁を異本基にもつくれど、吳氏にして、字を異樣にかきたるなるべし。檀越も當時は官人の名に阿彌陀、釋迦、藥師、沙彌などもつきたれば、常人の名なるべしといへり。

神風之伊勢乃濱荻折伏客宿也將爲荒濱邊爾

かみかせのいせの濱荻をりふせて
たびねやすらむあらき濱邊に

神風の伊勢とつゝくること、息吹の伊の一語に冠らしめたるなり。『風土記』の伊勢津彥の神風起しゝてふ神話めけるものを據とするは、心得ぬて

となり。濱荻は、濱に生ふる荻なり。『浪華のよしは伊勢の濱荻』など思へるは、ひがことなり。

慶雲三年丙午幸于難波宮時、志貴皇子御作歌　(卷一)

秋九月とあるべきなり。

葦邊行鴨之羽我比爾霜零而寒暮夕和之所念

あしへゆくかものはかひに霜ふりて
さむきゆふへはやまとしれもほゆ

和の字をやまとのことに用ゐらるゝは奈良の朝に始まれり。此の御歌は未だ藤原の朝なれば、こゝには倭の字なりしを、奈良の朝の人の書集むる時かへたるか。又夕と和の二字は、傳寫の誤りなるもしりがたし。冬になるゝ難波のあしへ行く、鴨の羽かひにまても、夕霜のおきたるけし

き身にしみて、旅のあはれも、ひとしほなるべし。

高市連黒人羇旅歌（卷三）

八首の中二首を取れり。黒人は藤原の朝の人なるべし。

櫻田部。鶴鳴渡。年魚市方。鹽干二家良進。鶴鳴渡。

さくらたへたつ鳴渡るあゆちかた

しはひにけらしたつなきわたる

櫻田部は櫻田てふ所の海邊にて、年魚市は愛智郡なり、共に尾張國なり。

四極山。打越見者。笠縫之。嶋榜隱。棚無小舟。

玄はし山うちこえみれは笠縫の

嶋こきかくるたななし小舟

四極山は攝津國なるべし、『延喜式』齋宮祭式に攝津國より笠縫氏參り來る由見ゆれば、其の氏人の住みけん嶋のありしならむ。棚無小舟は、水主が

歩む棚なき舟なり。

此の二首、前なるは、赤人の『しほみちくれは潟をなみ』てふ歌とは、そむきて對へる佳景にて、後なるは、『山重水複疑無路、柳暗花明又一村』の趣あり。

『雄略紀』に此月爲呉客通磯歯津路名呉坂とあるに見るも、其の地形思ふべし。

田口益人大夫任上野國司時至駿河國淨見崎作歌（同卷）

此の人は『文武紀』『元正紀』にも見えたり。上野守になれるは和銅元年三月なり。

書見欺。不飽田兒之浦。大王之命恐。夜見鶴鳴。

ひるみれとあかぬ田子の浦大君の

みことかしこみよるみつるかも

熊孺登が『唯見公程不見春』に似たりと、眞淵大人もいへり。二首の中なり、夕つかた淸見潟を見、田子の浦廻を夜に入りて過ぎたるなり。大王のなどいへるあたり眞淵の意を得たるなるべし。

遊覽

詠山（卷七）

昔者之事波不知乎。我見而毛久成奴。天之香具山。

いにしへのとはぢらぬをわれみても
ひさしくなりぬあめのかくやま

かく山のとは前にもいへり。『古今集』『我見ても久しくなりぬすみの江の岸のひめ松いく代へぬらん』とある同じ心なり。

同題（同卷）

動神之。音耳聞。卷向之。檜原山乎。今日見鶴鳴。

なる神のたとのみきゝしまきむくの

ひはらの山をけふみつるかも

巻六にも『鳴神乃音耳聞師』とあれば此にもかくよむべきなり。巻牟久乃日代宮は景行天皇のおはしましければ、檜原の山も名高く聞ゆ來しをけふ初めて見つるをよろこぶなり。以上二首とも心は皇室を祝ふなり。

天皇御遊雷岳之時。柿本朝臣人麻呂作歌　（巻三）

雷岳は『雄略紀』に七年秋七月天皇詔少部子連蜾蠃曰、朕欲見三諸神之形、汝齊力過人、自行捉來。蜾蠃答曰、試往捉之。乃登三諸岳捉取大蛇奉示天皇。天皇不齋戒。其雷尾々目精赫々。天皇畏恐、蔽目不見、却入殿中。使放於岳。乃改賜名爲雷。これより三諸山を雷岳といふ。

皇者神二四座者。天雲之雷之上爾。盧爲流鴨。

すめろきはかみにしませは天くものいかつちのへにいほりせるかも

廬は行宮をいふなり。天皇を神と申すことは、祝詞、宣命、古史等にもいと多かり。

同じ人の長皇子遊獵路池時とてよめる皇者神爾之坐者。真木之立荒山中爾海成可聞と同しさまなり。氣足り神完く、鵬鶚空に盤するが如く、雄健自ら喜ぶ。人麻呂の歌集中に存するもの、皆這般の風骨なり。人麻呂より上つかたの世に、かく巧みなる歌は見えず、萬葉集中よみ人しられざる歌にして人麻呂家集に出つるもの、いと巧みなるも多し。惣べて此人の他にも巧みは出て來しなるべし、時の去からしむる所なり。

天皇幸于吉野宮御製歌　（巻一）

此上に明日香淨御原御宇天皇代と標題して、さて天皇御製とあれば、是れは天武帝なり。

淑人乃良跡吉見而。好常言師芳野吉見與。良人四來三。

淑人（ヨキヒト）のよしとよくみてよしといひし
よしのよく見よきひとよきみ

淑人とは初めて吉野離宮を建て給へるは、孝德の朝なれば此帝をさして宣へるかなどいへど、古之賢人之（カシコキヒトノ）遊兼（アソビケン）吉野川原。雖見不飽鳴。てふ歌も同し心にて神仙譚の如き傳說のありて、そをさせるか。藥師寺佛足石の歌に釋迦佛をさしてよき人とよめり。首尾押韻なれば、四來三はよきみと訓む。

山部赤人作歌（卷六）

此の歌の上に擧けたる笠朝臣金村の歌の端に神龜二年五月幸于吉野離宮時として、並べあれば、同じ時にかと思はるれど、赤人の長歌に春の茂野とよみたれば、前の度にて二月三月の頃なるべきか。此に擧けたるは反歌なり。短歌を反歌といふは『文選』などに出てたる賦の亂辭を反辭といふより起れり。上代に長歌はありしかど、之れに添へたる反歌はなかりしなり。

此の体は全く漢文の影響なり。長歌を賦と書き、短歌を一絕と記したるも見ゆ。

烏玉之夜乃深去者久木生留清河原爾知鳥數鳴。

うは玉の夜の更ぬればひさ木おふる
きよきかはらにちどりしはなく

久木は楸の屬なりといへり、子のあるを梓といふ、なきをひさぎといひ、俗にアカメカシハといふも是れなり。清河原は吉野川原をいへるにて、其の河畔に此の木多かる故にいふのみ。千鳥は冬鳴くものなれば、いかゞとの疑もあれど、凡そ物に季てふことの定まれるは後の世のわざなり。見聞くにつけてよむは古の常なれば春にてもよむべし。

幸芳野離宮時歌（卷九）

何れの帝の御幸か考ふべからず。歌のさまは、藤原の季、奈良のはじめ頃の

人のよめるとれぼし。

落多藝知流水之磐觸興杼賣類興杼爾月影所見

たちたきちなかるゝ水の岩にふり

よとめるよとに月のかけみゆ

瀧川の岩にふれてながるゝ傍に、水の淀みあるなり、急流には月影の宿るべくもあらねど、其のよとみに泛べる影のさやかなるをよめるなり。

幸紀伊國時山部宿禰赤人作歌（卷六）

長歌の反歌二首の中なり。

若浦爾鹽滿來者潟乎無美葦邊乎指天多頭鳴渡

わかの浦にしはみち來れは潟をなみ

あしへをさしてたつ鳴きわたる

若浦は、今の和歌浦是れなり。此の御幸は神龜元年冬十月にして、詔して弱

濱の名を改めて明光浦となしたるは此帝にまします。若も弱も共に訓はワカにて、ワはアに通ふを以て、明光浦は訓アカにて、字を改められしのみなるべし。此の歌の類歌のことは、前に擧げたり。

潟乎無美は、潮の滿ちて、干潟の無くなりたるをいふ。片男波と書き、よせて返へらぬ波の名とせるは後俗なり。

十一月太宰官人等奉拜香椎廟訖退歸之時駐馬于香椎浦各述懷作歌（同卷）

神龜五年なり、此には帥大伴卿の歌一首を擧く。

去來兒等香椎乃潟爾白妙之袖左倍所沾而朝菜採手六

いさことともかしひのかたに白妙の

袖さへぬきてあさなつみてむ

浦廻にれりたちて、磯菜つまんは興あることとなれば、さかよめり。他にも似

たる意の歌あれど、今は調のよろしく、をりからの興もれもひやらるゝをとれるなり。

遊覽布勢水海舟泊於多祜灣望見藤花各述懷作歌。（卷十九）

四首の中にて、越中國守家持以下のよめり、此の歌は次官内藏忌寸繩麻呂なり。布勢水海は全國布勢湖なり。

多祜乃浦能底左倍爾保布藤奈美乎加射之氐將去不見人之爲

たこの浦の底さへにほふ藤なみを
かさしてゆかん見ぬ人のため

藤なみは藤廉にて、なびく意なり、草葉押靡とも、茂樹押靡とも、旗須々寸四能乎押靡などよめるナミと同じ。

底左倍爾保布と形容したる風神絶世。

山部宿禰赤人望不盡山歌（卷三）

長歌の反歌なり。

田兒之浦從打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪波零家留

たこの浦ゆ打いでゝみれはま白にそ
ふしのたかねにゆきはふりける

眞白衣をましろに、そとよむは、如何あらむと思ふべけれど、ふりけるの結にて此のにそなることを明かなり。『朗詠集』『新古今集』などに白たへにとよみ終りをふりつゝとかへしは、白たへの藤江、藤原などつゝけたるにも依るべけれど、そは藤布の意にて、不盡とは假名も異れり。且ふりつゝは幾日もそこに居て、ふりつゝつもるを見たる意になりて、元來直覺的なる歌の情を損ふこと尠からず。さて此の歌の樣は後世頼政の『あふみ路のまのゝ濱邊にてまとめてひらの高ねの花を見る哉』と似て、後なる駒とはめてて

ふ特殊的の形狀を添へ、印象更に明白となれるなり。

詠不盡山歌（同卷）

讀人しられず。右の赤人の歌につゝけてあげたれど、赤人の口つきならず。此の次に又赤人の作てふ端書の歌あれば、かた〳〵異人なり。これも亦長歌の反歌なり。

不盡嶺爾零置雪者六月十五日消者其夜布里家利

ふしのねにふりたける雪はみな月の
もちにけぬればそのよふりけり

みな月は神鳴月の義にて、雷の鳴る月なれば十月を神無月といひ、雷のならぬを表したるに對せるなりと荷田東萬侶の說なり。此の歌は元來たくみたる歌なれど、古人のたゞ〳〵に巧によめるは其の痕迹見えで、いかめしく面白く聞ゆ。

大伴佐提比古郎子、特被朝命、奉使藩國、艤棹言歸、稍赴蒼波、妾也松浦佐用嬪面嗟此易別、歎彼難會、即登高山之嶺、遙望離去之船、悵然斷肝、黯然銷魂、遂脫領巾麾之、傍者莫不流涕、因號此山曰領巾麾之山也、乃作歌曰、（卷五）

大伴金村の其の子盤、及び狹手彦と任那に遣されたることは『宣化紀』に見えたり。人を送るに高き山に登り領巾ふることは、古代の風俗にて『欽明紀』にも見え、又朝鮮にもありけるさまなり、そのことは『三國遺事』に證あり。

得保都必等麻通良佐用比米都麻故非爾比例布利之用利於返流夜麻之奈

とはつひとまつらさよひめつまゝに

ひれふりしよりおへる山のあ

得保都必等は、即ち遠つ人にて待つといはん料なり。此の歌をよしとには
あらざれど、有名なる故事なれば、擧げたるなるべし。眞淵は、今きくも肝に
しみて待りと情情を表し、後世の人は、かゝる切なることをもしらねば、徒
に辭藻の末に求めて不朽を願ふの非なるを論せり。

槐本歌（卷九）

此の卷に高市歌、山上歌など畧して書きたるもの十六七首あるは、皆氏あ
り。

樂波之。平山風之。海吹者。釣爲海人之。袂變所見。

さゝなみのひら山風のうみふけは
つりするあまの袖かへるみゆ

平山は、『齊明紀』に幸。近江國平之浦」とあるに同しく、今比良山といふ是れな

るべし。樂波てふに二つあり、此は志賀郡の地名なるべし。狹々浪栗林、狹々
波山なと『書紀』に處々に見ゆ。今一つは佐邪波、佐射奈美など書きて小波の
こと故、下のさを濁音に書きたり。
好景書くが如き感をなす。

古京

眞淵が殊に古京、及び皇居の二部門を設けたるは、集中此の類の歌多きにも依れることなるべけれど、其の古をひいて今に押しあて、ぬしの少からぬ感愴を此に寓せし微意を見つべきなり。是れ蓋し古へ賢人君子學問關係有る所以にして、世の常の歌よまんが爲めに、初めて歌書を繙くものと霄壤の差ある所たり。

高市古人感傷近江舊堵作歌（卷一）

是れは或本に黑人とあるをよしとす。堵は垣なり、集中舊京、荒都、荒墟、舊堵などさま〳〵に書きたり。天智天皇六年三月飛鳥岡本宮より近江大津宮へ遷らせ給ひ、十年十二月崩御まします、其の翌年は大友皇子の亂れにて、

同年冬飛鳥淸御原宮に天武のおはしませしより、大津宮荒廢して人々の悲しめるなり。

樂浪乃國都美神乃浦佐備而荒有京見者悲毛

さゝなみの國つみかみのうらさびて
荒れたるみやこ見れはかなしも

浦佐備は借字にて、裏進（ウラスヽミナ）而の意なり、みかみの浦濱の義にあらず。凡そさびてふ語多けれども、もとは進むことより出て、さま〳〵に別れたり、手すさび、翁ざびなどの如き、雨すさび、風すさむなどの如き、神さび、男さび、處女さび等の如し、心に進むかたより種々に轉じ用ゐられたり。此には荒振國つ神たちのかくあらされたるといふ意にて、大友の亂れは、皇室至大の變にて、天智帝の崩御すら怪しき限りなれば、時人のかく傷むこと切なりしも理なからず。

柿本朝臣人麻呂歌　（卷三）

淡海乃海夕浪千鳥汝鳴者情毛思努爾古所念

あふみのみゆふなみ千鳥なかなけは
こゝろもしぬにむかしれもほゆ

汝鳴者はやがて字の如く千鳥の汝が鳴けばなり情毛思努爾は心も去なゐさまにてふことにて草木の靡きしなゐるによせて心も去ぬにといへるなり

汝が鳴けばと千鳥にかけて言ひたる感情一しほ警切にして匹ひなき筆のつかひさまなり

傷惜寧樂京荒墟作歌　（卷六）

聖武天皇天平十二年に山城國久邇郷へ遷されて後のことなり原三首今二首を存す

紅遍深染西情可母寧樂乃京師爾年之歴去倍吉

くれなゐにふかくそみにし心かも
ならのみやこにとしのへぬへき

紅は深く染ひてふ料のみに置きつらんも此には、いと適切にて、句を飾りなから、一首のにはひともなれり。たくひもなく賑ひたりし奈良のみやこのことは、心にしてもあれはにや、かく荒されて、今は何のにはひもあらぬを猶こゝに我世もへぬべくたもはるゝとなり。

世間乎常無物跡今曾知平城京師之移徙見者

よのなかをつねなきものと今そしる
ならのみやこのうつらふみれは

此の末の一首はさはとよき歌にもあらざれど、眞淵の特に之れを取れりしは、寄托ありてのことなるべし。

皇居

大宰少貳小野老朝臣（卷三）

此人の名『續紀』に見ゆ。天平六年に卒したる人なれば、未だ久邇の都に遷されざる前によめるなり。朝臣の二字、名の下にあるは中世の例なれば、誤寫なるべし。

青丹吉。寧樂乃京師者。咲花乃。薫如。今盛有。

あをによし那良のみやこは咲花の

にほふがごとくいまさかりなり

元明天皇の奈良に都を奠めさせ給ひしより、聖武天皇に至りて、實に春の花の盛りにたとふべかりければ、此の歌奈良の繁華を三十一文字に道ひ

盡して畫くが如し。

讃三香原新京歌（卷十七）

山城國相樂郡久邇郷に三香原、泉川、鹿背山あとあれば、久邇都とも、三香原新京ともいへり。こゝにあけたるは長歌の反歌にして、歌の左に『右天平十三年二月右馬頭境部宿禰老麻呂作也』とあり。

楯並而。伊豆美乃河波乃。水緒多要受。都可倍麻都良牟。大宮所。

たゝなめていつみの川のみをたえずつかへまつらむたはみやところ

楯並而は、『古事記』神武の條に、多々那米豆伊那佐能夜麻能とあれば、たてなめてとは訓まざるなり。みをたえずは水脈の絶えざるなり、此の山礪の如く、此の河帶の如くなるもといへるに同じ。

讃久邇新京歌（卷六）

歌の左に、右二十一首田邊福麻呂歌集中出也とあり、長歌の反歌なり。

嬾嬬等之、績麻繋云、鹿背之山、時之往者、京師跡成宿。

をとめらかうみをかくとふかせの山

ときのゆけれはみやことなりぬ

績麻はうみ、うみ、うみたる麻をかくる桙といひ下せるのみ。卷十九に、『皇者、神爾之坐者、赤駒之、腹婆布田爲乎、京師跡奈之都』てふ心ながら、此の歌は更に境と事情に切なるを覺ゆ。胷頭の語は冠辭とのみ見るべからず。

雜事

謗佞人歌（卷十六）

歌の左に云く、『博士消奈行文大夫作之』と、『續紀』に『養老五年、明經第二博士正七位上、背奈公行文』云々とある此の人なり。『懷風藻』に其の詩見えたり。歸化人と見ゐたり。

奈良山乃兒手柏之、両面爾、左毛右毛、佞人之友。

おら山のこの手かしはのふたおもに

とにもかくにもねちけ人のとも

奈良山は、奈良の都邊の山なり。兒手柏は、卷二十にも、知波之奴乃、古乃手加之波能とよめり。凡そ木の葉は裏表あるに、これのみは分ち見ゐざる故、兩

面といへり。佞人之友といへるは、まずらをの伴なをいふ語例に同じ。例の世数に補ありとしてあけたるなり。

沙彌滿誓歌一首　（卷三）

右大辨從四位下にて笠朝臣麻呂といひけるが出家したるなり。

世間乎何物爾將譬旦開榜去師船之跡無如

よのなかをなにゝたとへん朝ひらき

こきにし船のあとなきかこと

旦開は、朝に湊より船發さするを云ふ、後の物に、あさぼらけとしたるは笑ふべし。又『こきゆく船の跡の白浪』としたるなど、詞のあやを飾れる功は、慥かに見ゆれど、古意を失ふのみならず、跡の白浪など歌意を複雜にし、感情を鈍らしむる患なき能はず。

天平十一年巳卯夏六月。大伴宿禰家持。悲傷亡妻。

作歌。（卷三）

數首の中に、移朔而後、悲嘆秋風、家持作歌として、此の歌あり

虛蟬之代者無常跡知物乎秋風寒思努妣都流可聞

うつせみの世は常なしと云るものを

あきかせさむみ云のひつるかも

うつせみは、もと顯御身などいへる語より出てたれば、うつせみの妹と今みる女をもさしていで、顯身なるを、『古今集』の頃には、はかなき譬へとのみれもひて、空蟬の借字を實にせり。

麻續王流伊良虞島之時。人哀傷作歌（卷一）

此の王の配所に關し、『天武紀』に記する所、疑ひありて、前修說われど、此に略す。

打麻乎麻續王白水郎有哉射等籠荷四間乃珠藻苅麻須

うつそをゝみのたほきみあまなるや
いらこのしまのたまもかります

打麻乎をウチアサヲ、ウチソヲなど種々によめり。眞淵は卷十二の娘嬬等之績麻之多田有、及び卷十六の打十八爲麻績之兒等を證としてうつそを の四言の句となせり。有哉も、多くアレヤとよめど。眞淵はアルヤと定めたり。

麻續王聞之感傷和歌

虛蟬之命乎惜美浪爾所濕伊良虞能島之玉藻苅食。
うつせみのいのちを惜み波にぬちぬれつゝ
いらこの嶋にたまもかりをす

食の字は、をすとよみて、物くふことなり。藻をかりくひて、命をつぎぬとよまれしなり。

有間皇子自傷。結松枝歌 (卷二)

二首の中一を擧く。此の王は孝德天皇の皇子なり、齊明天皇の時、反を謀り天皇を紀伊の温湯に誘ひまゐらせしか、事現はれて、藤白坂に絞らる。此の歌は其の捕はれたる際自ら傷みてよめるなり。

家有者。笥爾盛飯乎。客枕。旅爾之有者。椎之葉爾盛。
いへにあれはけにもるいひを草枕
たびにしあれはしひのはにもる

遇を感じて、かくよみたるなるべし。集には此の次に、長忌寸吉麻呂の結ひし松を見、哀咽して作れる歌を出せり。

聊述私懷歌 (卷五)

原三首なり。末に『天平二年十二月六日筑前國司山上憶良謹上』とあるは、太宰帥大伴旅人卿に贈れるなり、されば にや私懷云々と題を置きしならん。

阿麻社迦留比奈爾伊都等世周麻比都々美夜故能提夫利和周良延爾氣利

わまさかるひなにいつとせ住ひつゝ
みやこのてふりわすらねにけり

『孝謙紀』に寶字二年十月の敕に頃年國司交替皆以四年爲限云々自今以後宜以六年爲限とあり四年を以て限りとせられし時にも猶其の任に留められたるがありて『鄙に五年住ひつゝ』と嘆きたるなり旅人卿の大宰帥より大納言に轉じて京に歸りたるにつけ此の歌を贈り狀を陳じたるなり

遊於松浦河贈答歌（同卷）

序あり松浦縣に遊び玉島の潭に臨み忽ち魚を釣る女子等に値ひ贈答したる由見ゆ作者誰とも知りかたし旅人憶良及び吉田連宜などの後に之れに和する歌あり此に擧げたるは女子の答歌なり

多麻之末能許能可波加美爾伊返波阿禮騰吉美乎伊佐之美阿良波佐受

阿利吉

たましまのこの川上にいへはあれと
君をやさしみあらはさすあり
き

名を告ることは夫と契りする時の習なり君をやさしみはつかしくの意賤しき家とこゝろをゐあらはさずとなり

右に擧げたる歌の次に蓬客等更贈歌三首とあり又其の次に娘等更報歌三首あり其の中なる一首

麻都良我波奈々勢能與騰波與等武等毛和禮波與騰麻受吉美遠志麻多武

まつらかは七瀬の淀はよとむとも
われはよとます君をしまたむ

松浦川に多くの川淀はあれど、我が思ひはよとむ時なく、一すぢに君を待たむとなり。

此の序詞など、『文選』の詩賦を學び、離騷の字句を踏襲したるより見るも、美人香草の寄托の旨を知り難きにあらず、或は憶良の作か。

著者云く、此の書普通勅撰、撰集を選集と書きたるは、余が人の猶くならざる性爾り。選を撰と做すは和習の謬りなれば也。

宴會

三月七日於河内國伎人（ヒトノサト）郷馬國人家宴會歌

（卷二十）

伎人は眞淵はキヒトとよみたれど、クレとよむべきにか、『和名抄』には漏れたり。此の歌天平勝寶八年二月二十四日太上天皇、大皇太后河内の離宮に行幸の時なり。歌の左に『右一首主人散位寮散位馬史（ウマノフヒト）國人』とあり。

爾保杼里乃於吉奈我河波半多延奴等母。伎美爾可多良武巳等都奇米也母。

にほ鳥のたきなか川は絶ねぬとも
君にかたらんことつきめやも

古新不詳と註せり。國人が古歌を誦したるにもや、又將た地名の適へるものから國人の作れる歌かとも疑はるれば、此く標したるなるべし。於吉奈我河波は、息長川にて、にはとりは冠辭なり。此の川近江國坂田郡に在りといふ。

此の歌、河水を以て誓いとせるなり。

冬十二月十二日。歌舞所之諸王臣子等。集葛井連廣成家宴歌（卷六）

二首の中なり。其の詞に云く、比來古儛盛興。古歌漸晩。理宜共盡古情。同唱此歌。故擬此趣。輙獻古曲二節。風流意氣之士。儻在此集之中。爭發念心。和古體。

我屋戸之梅咲有跡。告遣者。來云似有散去十方吉。

わかやどのうめ咲たりとつけやらは

こちふに似たりちりぬともよし

こちふに似たりは來んといふに似たりの意なり。

原二首の中なり、獻古曲二節とあれば、共に古歌なること明かなり。『古今集』に、『月夜よし夜よしと人につけやらは來てふに似たりまた來すもあらず』といふも、よみ人しらずとして出てたる古歌なれば、萬葉に逸して、古今に傳はれるにもやあらむ。

大綱公人主宴吟歌（卷三）

これも古歌なり、宴會には古歌を唱へたる例いと多し。

須麻乃海人之。擣燒衣乃。藤波。間遠之有者。未着穢。

すまのあまのしほやきぬの藤ころも

まとほにしあれはいまたきなれす

藤衣は『山田もる里の藤衣』ともよみて、藤の皮の纖維より製したる賤の衣

なり。後には喪衣を藤衣といふは、粗き布に負はせたる轉用の名なり。
もとは里閭間の相聞の歌なるべきを、其の辭を取りて、意を盛儀の宴會に逢ふの稀れなれば、來慣れずと謙遜するに假りたるなり。
眞淵の特に宴會の一部門をたてたるは、先王禮樂の此に在ることを思ひ、郁々たる古の文明を偲ぶ情の切なるに出つ。

賀

志貴皇子懽之御歌（ヨロコビ）（卷八）

此の懽は、何の時なるかを詳にせず。皇子は天智天皇の第七子に在せり。

石激。垂見之上乃。左和良妣乃。毛要出春爾。成來鴨。

いはゝしるたるみのうへの早蕨の
もえづるはるになりにけるかも

垂見は垂水にて、攝津國に在り。卷七に命幸久吉。石流垂水水乎結飲都（イハバシル ムスビナノミツ）と見ゆるもこれなり。たるみの山に冬こもれりし蕨の春にあひて、萌え出つる如く、時を得給ふ御よろこびの心をよみ給へる歌なり。

賀陸奥國出金詔書歌（卷十八）

大伴家持の歌なり。聖武天皇天平二十一年陸奥國より、黄金を貢したる誰も知る所なり。

須賀呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知能久夜麻爾金花佐久

すめろきの御代榮えんとあつまなる
みちのくやまにこがねはなさく

山に櫻花などの咲くになぞらへて、みちのくやまにこがね花さくといへるは、咲くと榮ゆとは、もと同じ語にて、集中に『春花のさかゆる時に』ともよめり。上に御代さかえんといひたる下に、よくにはひ合ひたり。

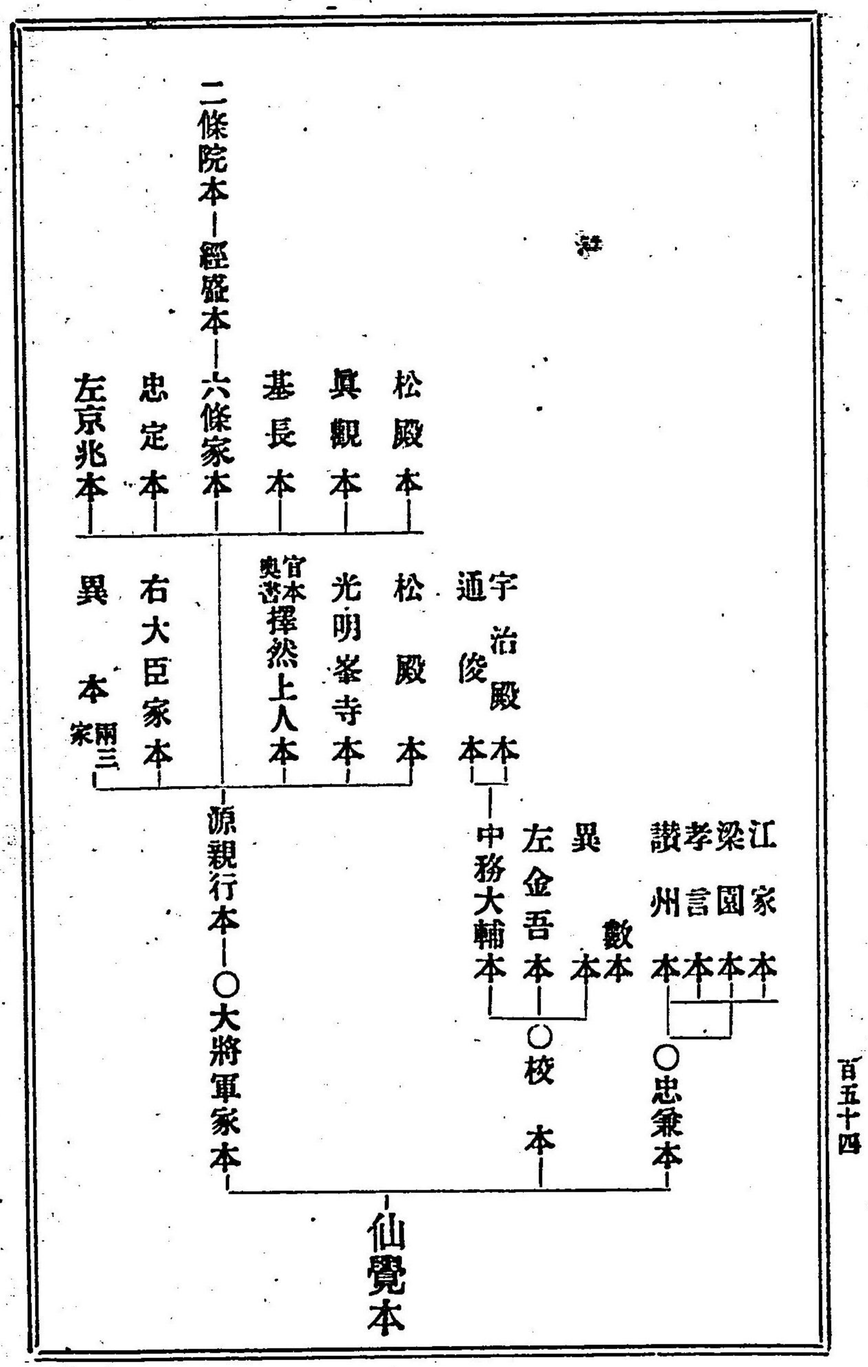
眞淵大人の最終に、此の歌をあげたる眞意は、序論に詳しく言へり。寫して此に至れば、瑞氣の筆端を繞るを覺え、古直悲涼なる大人の精神面目の其の中に躍動するかと疑はしむ。思ふに萬葉集は、眞淵が無上の法寶にして、家持卿は大人が、唯一の理想的人物たりしなり。

一萬葉集新校本統由系譜

佛教修多羅の結集、耶蘇聖典の整頓、及び儒家の書、禮、論語、孝經の今も尚正譌の論、衆説紛然たる類、古書の整理は、旦夕の能くする所にあらず。萬葉集も亦初めより今日の如き狀態をなしたるにあらざるのみならず、其の借字の煩、語言音韻の變化は、人をして之れに對して、望洋の嘆あらしめ、前賢校讐の勞、決して今人の夢想する所にあらざりしなるべし。夫れ書を校するは、落葉を掃ふが如しと云へり。隨つて掃へば隨つて生するを謂ふなり。仙覺新點後、尚學者の論議を絶たざるものは、是れを以てなり。

此に仙覺本の統由する所を圖示す。此の系譜は、木村正辭の書目提要に據る、吾人は此の各種本に就きて校點年譜の稿を起せしかど、今未だ全く業を卒へざるを以て、暫く重刊の時を待ちて補刻すべし。

系譜中○符あるは、三個證本を示したるものにして、此の證本を根據として、各種本に依り校讐したるものなり。



二萬葉學統由系譜

○木下長嘯子—山本春正

○荻原宗固—○塙保己一—屋代弘賢
長野美波留

○富士谷成章—○富士谷御杖

○香川黃中—○香川景樹—穗井田忠友
中村守臣

○橘守部

○吉田令世

(其一)

○僧契沖—今井似閑
海北若沖
野田忠肅
入江昌喜

○天野信景—河野秀穎—○河野秀根

○高井宣風—高井八穗

○鹿持雅澄

◎萬葉集ニ關スル著書アル人ノミ。
ヲ擧ケ一二然ラサルモノヲ加ヘ
タルノミ尋常古學系譜ト同シカ
ラス

（其二ノ上）

- ○荷田春滿
  - 荷田在滿
  - ○加茂眞淵
    - ○本居宣長
      - 本居春庭
        - 足代弘訓
      - ○本居大平
        - 石津亮澄
        - ○妙玄寺義門
        - 西田直養
      - 田中道麿
      - 長瀨眞幸
      - 橋本稻彥
      - 興福寺春登
      - 久保季茲
      - ○伴信友
      - ○平田篤胤
      - 黑澤翁滿
      - 林國雄

（其二ノ下）

- 伊能魚彥
- ○加藤宇万伎
  - ○上田秋成
- 德川宗武
- ○荒木田久老
  - 荒木田久守
- 山岡浚明
  - 本間游清
    - 横山由清
- 服部高保
- 村田春海
  - ○清水濱臣
    - 澤眞風
    - 前田夏蔭
  - 小山田與清
    - 椿仲輔
    - 鶴峰戊申
    - ○伊能穎則
      - 木村正辭
      - 小中村清矩
      - 榊原芳野
      - 間宮永好
- 加茂季鷹
- ○加藤千蔭
  - 加藤千年
  - 正木千幹
- 栗田土滿
  - 石川依平

◎本系譜ノミハ必スシモ萬葉學ヲ主トシタルニアラス

○俊成—○定家—爲家—○二條爲氏
　　—○冷泉爲相—四世爲尹—○上冷泉爲之
　　—○下冷泉持爲—

（其三）

—六世爲滿—七世爲村
—東素遲—七世東常綠—宗祇—五傳細川幽齋—

—中院通勝
—松永貞德—北村季吟

三萬葉學年表（節錄）

一本年表は拙著「萬葉集年表」及び「萬葉學年表」の中、後者につき、今茲明治三十三年より以往四百年間を節錄したるものなり

一本年表の最も苦心したるは、橘諸兄歿年より仙覺の前後に至る約五百年間に在り。本書再版又は三版の際年表全部を掲くべし。

一何年某と記したるは、其の歿年を示せるなり。歿年詳かならざるものは、其の生存前後の年次に掲く。

一氏名の下に記したる書名は、萬葉又は萬葉集の三字を冠すべきものにして、此の年代に於ける萬葉書目は此に悉せり。木村正辭の書目及び提要に漏れたるを多く此に擧けたれども、亦彼れに在りて此れに脫したるものあり、重刊の際補正すべし。

文龜	二	三	永正	二	三	四	五	六	七	八	九
後柏		二年宗祇（註抄書五）						五年中御門宣胤（類聚抄若干）			

	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	大永	二	三	四
天原												

	五	六	七	享祿	二	三	四	天文	二	三	四	五
後皇												

六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 弘治 二 三 永祿 二 三 四 五 六 七 八

奈良天皇 | 正

六年三條西實隆

一三年近衛尚道

九 一〇 一一 一二 元龜 二 三 天正 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 文祿 二

親町天皇 | 後陽

六年冷泉爲純

二年三條西公條

三 四 慶長 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 元和 二 三 四 五 六 七

成天皇 | 後水

一五年細川幽齋

一九年近衛信尹

四年冷泉爲房

五年藤原肅

八 九 寛永 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 正保 二 三 四 五 慶安

尾天皇 | 用正天皇 | 後光

一四年本阿彌光悅

二 三 四 承應 二 三 明暦 二 三 萬治 二 三 寛文 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 延寳 二 三 四

明天皇 | 後西院天皇 | 靈元

三年木下長嘯子（山本春正特解二一）

二年松永貞德

三年林羅山（聖堂本校者）

五 六 七 八 天和 二 三 貞享 二 三 四 元祿 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 寳永

天皇 | 東山天

三年下河邊長流（名寄四）

二年今井似閑（緯一〇）

一〇年水戶光圀（目安一、釋五〇）

一四年契冲（海北若冲、類林一五、作者履暦九。野田忠粛、類句若干）

二	皇	二年北村季吟（拾穗抄五）
三		
四		
五		
六		
七	正德	
二		
三	中	
四		
五		
享保		元年安藤爲章
二	彼	
三		
四		
五		
六		
七		
八		
九		
一〇	門	
一一		
一二		
一三		
一四		
一五	天	
一六		
一七		

一八	皇	
一九		
二〇		
元文		
二		
三		
四		
五	寛保	
二		
三	延享	
四		
寛延		
二		
三	寶曆	
四		
五		
六		
七		
八		
九	桃	
一〇	園	
一一	天	
一二	皇	二〇年壺井義知
一三	櫻町天	元年荷田春滿（童蒙抄八〇）
明和		全年近衛家熙
二		
三		
四		
五		
六		天野信景
七		
八	安永	
二		
三		
四		
五		
六		
七		
八		
九		元年荷田在滿
天明		
二		
三		
四		
五		
六		
七		
八		

一一	皇	
一二		
一三	後	
明和	櫻町天皇	
二		
三		
四		
五		六年德川宗武
六		全年加茂眞淵
七		
八	後桃園天皇	
安永		
二		
三		
四		
五		五年谷川士清
六		六年加藤美樹
七		
八		八年富士谷成章
九		九年山岡浚明（考一）
一〇	光	
一一		
一二		三年伊能魚彥（千歌一）
一三		四年田中道麿（問答書二、名所秀歌抄若干、東語菜一、選集徵四）
明治		
二		
三		
四		
五		
六		
七		
八		

寛政	格	惠岳（選要抄九、撮要一傍註二〇）
二		池永泰眞（見安補止一〇）
三		
四		
五		五年服部高保（大註三）
六		
七		河野秀根（集解若干）
八		
九		
一〇		
一一		
一二		一二年入江昌喜（類聚抄一六、全補闕一五）
享和	天	元年本居宣長
二		
三		三年荒木田久老（槻落葉三）
文化		高井宣風（殘考三）
二		三年伴賀芳
三		
四		
五		
六		
七		
八		
九		
一〇	皇	五年加藤千陰（畧解三〇）
一一		六年上田秋成（目安補註五）
一二		八年村田春海
一三		源義雅（作者部類一）
一四		同正木千幹

文政	仁	長瀨直幸（佳調二、拾遺一）
二		
三		四年塙保己一
四		五年富士谷御杖（燈若干）
五		
六		七年清水濱臣（考註二一）
七		
八		
九		
一〇		一〇年尾崎雅嘉（鄙言若干）
一一		
一二		一二年松平定信
天保	孝	荒木田嗣興（品類抄四）
二		二年北野鞠塢（草木考若干）
三		
四		六年石川雅望
五		全年狩谷望之
六		林國雄（當盤陰若干）
七		黑澤翁滿（大全若干）
八		
九		
一〇	天	九年片岡寬光（長歌類林一〇）
一一		一〇年香川景樹（指解五）
一二		一二年加茂季鷹（類句一〇）
一三		全年平田篤胤
一四		一四年本居大平（合解若干、山嵐百首二）
弘化		
二	皇	

三	孝	
四		
嘉永		
二		
三		
四		
五		
六		
安政		
二		
三	明	
四		
五		
六	天	萬延
文久		
二		
三		
元治		
慶應		
二		
三	皇	
明治		
二		
三	今	
四		
五		
六		

寛政	格	吉田令世天保中人（綺語標一）
二		弘化三伴信友（索引若干）
三		全年橘千蔭（發揮二）
四		弘化四穗井田忠友（地名考若干）全年小山田與清（采用四、仙覺字類、采葉集目錄各若干）
五		
六		嘉永二橘守部（緊要二、墨繩八四）六年荒木田久守（同字部類、禽獸草木考各若干）
安政		
二		
三	明	
四		安政二年色川三中（會談活眼携一、名物類字一六）崇四年足代弘訓全年北村節信（拆木考）
五		
六	天	崇六年石川依平（釋名登（名物考三））
萬延		橘本直香（上野國考二）
文久		
二		兔持雅澄（古義二二五）
三		鵜飼戊平（古調梯若干）
元治		元治元年前田夏陸（私部二四）
慶應		
二		三年萩原廣道（畧解補遺五）全年加藤千年（畧解頓末）
三	皇	
明治		西田直養（長歌格）
二		慶應二年黑川春村
三		四年野々口隆正（長歌百首解一）
四		
五		五年岡宮永孚（長歌部
六		

七	類四、仝類語五、仝地名抄若干）	
八		上
九		
一〇	一五、中村守臣（儀訓考一、雜考一、詞字欠字考一、言葉林一、詠格二、對句二）	
一一		
一二		
一三		
一四		
一五		
一六		
一七		
一八		天
一九		
二〇	※正木（借字對照一、檜落葉一、附釋二、拾遺一、名所類聚一〇、林始一五、冠履三、列々番一五、夜麻多登五、拾遺三）	
二一		
二二		
二三		
二四		
二五	足代（類語九五、名所部類一、頭字部類四、音訓五、槻落葉辨誤一、延約一、釋例一、卷々時代一）	
二六		
二七		
二八		
二九		皇
三〇	※石川（新採百首續歌一、三山歌考一）	
三一		
三二		
三三		

注意

人名の下括弧内の人名あるは其の門人の歿年不知の分なり

契沖、淵、宣長に限り故らに書目を擧げず

時報

古今文學第九號

◉古今文學臨時刊行、『古今文學』第九號は臨時刊行となし、『萬葉詳釋』全一冊を以て之れに充てたるを以て、本月は雜誌を發行せず、來十一月十五日第十號を出し、其の体裁は從前通常の通りなるも、材料を精選し、趣味多き文字を以て充たしむべし。

◉國語漢文科教員講習錄　古今文學會は益々會務を擴張し、來一月より題號の如き講義錄を出版し、中學校、師範學校、及び高等女學校教員檢定試驗志望者、幷に仝教員の講習に供せんとす。其の詳細は來月發行の雜誌第十號に報告すべし。今や仝教員の專用は益ゝ多く、志望者亦少からずと雖も、適當なる指南者無く、偶ゝ類似のものあるも、鹵莽粗撰無責任にして、且仝試驗の方針と適合せず、大に遺憾とする所なりしが、是等の欠點に注意し、且短期にして、最も價値ある講習錄を供給せんとす。

◉萬葉學に關する研究　萬葉學の氣運は、近頃漸く勃興し來らんとす。『代匠記』は活版に附せられ、其の一帙は既に出て、又木村正辭翁の註解本も遠からず上梓せらるべしと聞く。古今文學が仝翁の山常百首の講義を掲くる外、翁は亦國學院雜誌に古義存疑を連載せり。日本新聞は曩に俳人子規の萬葉評を掲げ居りしが、俳句、及び新体詩を學

ぶ青年諸子の次第に此の集を繙く者多きは喜ぶべしと雖も、萬葉學の渺洋たる、羅針無くして渡るべきにあらず、故に吾人は先つ此の『萬葉評釋』を薦めて、萬葉學の何たるを知ることを要す。蓋し『萬葉評釋』は古來のものに比し、最も善く萬葉學の何たるかを說けるものにして、此の點に於て、慥に萬葉學の一進歩を認むるものたるを以てなり。

◉源氏物語の新研究　源氏物語は浩瀚にして後の學者は、之れを通讀するすら容易の業にあらざれば、其の研究も思ひの外に進歩せず、湖月抄の徒徑に慣れて、花鳥、河海は湖月抄より孫引するのみにして、其の實物に接せざる有樣なれば、其の語句の解釋に於ても、既に此の如く古人の糟粕に甘んじ、此の物語に包藏する種々の資料は、未た多く學者の手に觸れざりしが、今回『萬葉評釋』の著者と同じ人の手に依りて、其の新研究の結果を公にせらるゝは遠きにあらざるべしと云ふ。『萬葉評釋』は、萬葉學の新門路を洞開したる迄にして、隨つて輕銳なる一小冊子の姿を以て現はれたりしが、源氏物語に關するものは、之れに比すれば、其の量に於ても、數倍の大さを以て出つべしと云ふ。萬葉學に於ても、『評釋』は其の序論に過ぎざれば、早晩更に『廣萬葉評釋』を出すの時あるべし。

◉定價變更　『萬葉評釋』は定價廿五錢としたれど、會員又は購讀者にして、前金ある諸君には、特に不足金を增徵せず。

明治三十三年十月廿七日印刷
明治三十三年十月三十日發行

古今文學　毎月一回一冊定價廿五日發行金貳十錢　臨時增刊第九號　定價金貳拾五錢

東京市神田區駿河臺袋町一番地
編輯兼發行人　田中眞弓
東京市神田區仲猿樂町四番地
印刷人　藤澤外吉
東京市神田區仲猿樂町四番地
印刷所　日本印刷株式會社
發行所　東京市神田區駿河臺袋町一番地　古今文學會

不許複製

古今文學

◉古今文學會會員募集

一入會金　特別半額一圓五十錢

一會費　通常半額五十錢

三月々分金五十七錢　半年分金壹圓五錢　一年分金壹圓九十貳錢
二年分金二圓六十錢　三年分金五圓四錢　六年分金八圓八十貳錢

◉第九號迄既刊

初號より取揃へ需めに應ず
毎月一回菊版百五十餘頁

◉見本は郵券廿錢

◉會則は無料送呈

本誌は本會が明治文學を大成せん爲めに機關として發行する雜誌にて會員には無料にて配付す其内容は博士學士又は專門諸大家の執筆を以て充たし會員の實力養成を主としたれば文學或は散文韻文の研究に志ある諸君には無比の良師友也目下續出の講義は左の如し

日本語典　萬葉山常百首　廿一代集秀歌　雅亮裝束抄　武器要語（圖入）日本史兵志
白氏文集　戲曲史　梵漢文學史　修辭學　言語學　世界詩歌評釋　俳諧評釋　書法

◉此際入會金を特に半額とし三名以上一時に入會者へは優美なる會員証票（三十錢）を無料にて送呈しなほ會員には種々特典多し

◉古今の有益書を續々臨時出版し會員には定價二割引にて頒つ

東京駿河臺袋町一番地　古今文學會

文部省國語漢文檢定委員
第一高等學校教授正七位　今井彦三郎著
東宮侍講正五位　豊居
序　本

神樂催馬樂通解

目次

●神樂催馬樂通解の引　●神樂催馬樂の由來　●神樂催馬樂名義の一　●同二　●同三　●異本　●注釋もの及び參考すべきもの　●神樂歌釋義　●催馬樂歌釋義

神樂催馬樂は我國最古の歌にして句形定まりなく自由自在に詠みなして趣味の津々たる多く比類を見ず其價値は普く後人に認められ就中中古の國文書にして是れに依りて其美趣を添へざるもの極めて少なき程なれど解義の至難なること適當なる註釋書あきこの故を以て近來是れが研究の盛ならざるを遺憾とし本書は著書が和漢の學に精通せる眼識を以て解題に釋義に頗る詳述明解を加へ僅に一册子能く神樂催馬樂を知るに足らしめたり幸に發刊日猶淺くして初版は將に盡きんとす文學歌學に志ある諸士速に一本を座右に供へられよ

和裝全一册
上等洋紙摺
定價金廿錢
郵稅金四錢

東京駿河臺袋町一番地　古今文學會

●大賣捌　明治書院　東京堂　上田屋支店　吉川半七　北隆館　東海信文合資會社

村雨莊司增田于信著

古京の秋

一册定價金拾貳錢

袖珍美本

目次

(一)賀茂の秋風
(二)定家の山莊
(三)祇王の故居
(四)常寂寺の萩
(五)野宮の蟲
(六)仇し野の露
(七)嵯峨の松茸
(八)岩倉の鹿鳴
(九)山科の驚狩
(十)神樂岡の月
(十一)雙丘の散策
(十二)叡山の登臨
(十三)坂本の丹楓
(十四)嵐山の秋葉
(十五)高雄の紅葉
(十六)修學院の楓
(十七)桂離宮の楓
(十八)高倉宮の墓
(十九)兩鄰の溫習
(二十)笠置の時雨

西都の山水風光に富める今更いふべきにあらず殊に秋色の雅麗なる最も愛すべし著者此地に遊ぶ數十回能く其實況を寫出して餘りあり年力輕妙詩みて爽快を覺ゆ地理歷史の補たる亦尠からず稿既に成る發行旬日を出でゝ

發行所　東京駿河臺袋町一　古今文學會

和歌俳句懇請

題隨意

料紙短册裏面ニハ官位住所氏名御詳記ヲ乞フ

明ル一月愚父知鑑還曆之賀會相催シ度候ニ付遠地ノ諸大家ニハ玉詠ヲ請ヒテ斯會ノ盛大ヲ計リ且家寶トシテ永遠ニ保存致シ度志願ニ付江湖ノ雅君御芳詠御寄贈被下度奉懇願候但景況等ハ芳詠ト共ニ新聞紙上又ハ雜誌等ニテ御披露致スヘク候謹言

羽前國西村山郡西五百川村三中

懇請者　志藤豐治

追テ製册實費トシテ十錢御寄贈ノ諸彦ニハ諸大家ノ選定ヲ乞ヒ美册並ニ優等ノ部ニハ美歌ヲ呈ス

改號披露廣告

小庵儀今回長崎桐子園竹外宗匠ヨリ左之通賜號ニ付倍舊御風交ヲ祈ル

肥前國東松浦郡名古屋

十月十六日　通稱　松尾連

賜號　松風閣　鶴友　事改　冬外

文藝及紀行書類

文學士大町桂月君著
美文韻文 **黄菊白菊** 全壹冊洋裝袖珍 正價貳拾五錢 郵稅六錢

武島鑑井大町文學士著
美文韻文 **花紅葉** 全壹冊洋裝袖珍 正價三拾錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
散文韻文 **雪月花** 全壹冊洋裝袖珍 正價壹拾五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
散文韻文 **深山櫻** 全壹冊洋裝袖珍 正價四拾錢 郵稅六錢

文學士武島羽衣君著
霓裳歌話 全壹冊洋裝袖珍 正價三拾錢 郵稅六錢

文學士土井晚翠君著
天地有情 全壹冊洋裝 正價貳拾錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著
大絃小絃 全壹冊洋裝袖珍 正價三拾錢 郵稅六錢

江見水蔭君著
戀 全壹冊洋裝袖珍 正價三拾錢 郵稅六錢

大橋乙羽君著
風月集 全壹冊洋裝 正價三拾錢 郵稅六錢

花木春過ぎ夏亦謝して、燈火親しむべきの時は來りぬ、明窓淨几の下、此清友の無盡興味を愛讀せられよ

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

內田不知庵君著
文藝小品 全壹冊洋裝 正價三拾五錢 郵稅六錢

田山花袋君著
南船北馬 全壹冊洋裝 正價四拾錢 郵稅六錢

大橋乙羽君著
耶馬溪 全壹冊洋裝 正價四拾錢 郵稅四錢

巖谷漣山人著
笑 全壹冊洋裝袖珍 正價四拾錢 郵稅八錢

幸田露伴君著
枕頭山水 全壹冊 正價拾五錢 郵稅六錢

文學士高山林次郎君著
時代管見 全壹冊洋裝 正價三拾錢 郵稅六錢

饗庭篁村君著
聚寶盆 全壹冊洋裝 正價壹拾五錢 郵稅六錢

各冊皆洋裝或は袖珍
美麗優雅なる好冊子なり

教育時論

毎月三回　第五百五拾九號　五ノ日發刊

明治十八年四月十五日初發刊　明治三十三年十月廿五日發行

（定價改正　一部八錢　前部十錢　金前部十七錢　金前部十二錢
郵稅不要　但一部十三錢　前部十四錢　金前部二十五錢）

社說

●惡例を貽す勿れ

學說政務

●中學校の補習案　山本　良吉

●小學校用の算術書に就いて　中島吉太郎

教授管理

●實地教授上より見たる新字音假名遣法と字訓假名遣法との關係　津田　信雄

理科哲學

●最近の化學的研究より達せる地球發展の狀態（下）　秋山鐵太郎

文藝史傳

●聖諭例歌　石川　岩吉

●教育時言　指原　安三

●晩秋　菅　風子

內外雜纂

●けむり　でんき

●教育雜話　竹內　楠三

●時文一束

●斷簡零墨（碧彩）

●寄贈新刊

教育論叢

●教育淺村勝君に乞ふ　瀨谷重太郎

●字音假名遣及び漢字制限法と小學校教科書編纂　奥原　福市

時事彙報

●東宮殿下の御西行　●東宮妃殿下の御帶　●新文部大臣の調査の成行　●實業學校令の改正に對する折衷說　●文部省中學校令の改正　●各種實業學校の羅馬字綴方調査　●小學校令中疑義問答　●教員檢定試驗日時割　●大學院及東京帝國大學入學生豫修科目の檢定　●教員學生の乘車賃割引　●東京市學務統一案の成行　●小學教員養成法調査　●橫濱市の小學校增設　●北海道就學兒童の現況　●長崎市の小學校維持の困難　●海外教育近況

時事寓感

●かきよせ（二十四）　●東宮殿下の御西巡　●新文部大臣　●澤柳氏の演說　●小學校令の教員問題　●音訓假名遣の關係論　●境能く氣を移すもの　●對岸地理智識の缺乏

中央公文

●叙任辭令

東京神田區美土代町貳丁目壹番地　開發社

文學士　澤柳政太郎先生著

讀書法

○書籍の効益は固に大なりと雖浸然雜讀するのみにては格別利なし若し其効益を全ふせんとせは讀書法則を知らざるべからず

本書は心理學の大家「ペイン」故エール大學總長「ノアポルター」教授「リチャードソン」等諸學者の讀書法に關する著書を參考して著述せられたる者にして今日に最適切の良書なり學科の何たるを問はず苟も書籍を手にせらるゝ諸氏は先づ本書に就て讀書の法則を窺ひ而して後繙かるべし法則に從て讀むとは其効果必ず雲泥の差あらん本書は眞に學生必讀の良書也

洋裝全一冊　定價金貳拾錢　郵稅金四錢　一錢郵券代用郵稅共金貳拾七錢

發兌元　東京神田小川町一番地　寶永館書店

發賣所　全區裏神保町九番地　富山房書店

全　全區表神保町二番地　東京堂書店

全　日本橋區通り三　林書店

其他全國各書店

贈正四位釋契沖阿闍梨撰　從五位木村正辭先生校訂

萬葉代匠記

五十四卷綴五十帙にて全部完結　全廿五册

第一帙十月廿日發刊　毎帙八拾錢郵税八錢

本書は萬葉注釋書中の巨觀にして實に萬世不朽の名著なれ共由來流布本皆開書の傳寫にして眞の代匠記に非ず今般弊店が原本とするは今の萬葉學の大家木村正辭先生所藏契沖師自筆の精撰本の傳寫にして此本固より他に傳本なし今別に先生の校訂を乞ひ嚴正なる校合の下に第一帙及第二帙を發刊せり印刷鮮明用紙上質全部紙數三千數百頁

十二月十日發賣

洋紙刷和表紙　正價壹冊五錢　郵税四錢

契沖阿闍梨撰

百人一首改觀抄

本書は圓珠庵契沖阿闍梨が卓拔なる見解と該博なる學識とにより百人一首を釋疏したるもの刻本として流布するは自儘なる節略を加へ却て原意を損する事なしとせず今者上梓する處の改觀抄は圓珠庵藏契沖自筆の原本により忠實なる校合を與へたるもの我邦歌集中最も普遍なる百人一首は吏に本書によりて一層世に洽通なるに至らむ

發兌元　東京神田淡路町一丁目一　四海堂

19
626

19
626

086624-000-5

19-626

万葉評釈

長井　金風／著

M33

DBD-1765